

「ご縁で結ばれ活かされたこの19年」：御礼の言葉

2013年9月 徳丸 克己

このたびは、入江正浩、井上晴夫、小尾欣一、藤嶋昭、増原宏、水野一彦、吉原経太郎の諸先生がたのお呼びかけで、私を囲む会に多数の方々がご賛同、ご参加下さり、大変光栄に有難く存じております。

1973年秋に創立された筑波大学に、初代の化学系長の故大饗茂教授から新設する大学院の教授としてお誘いを頂き、1975年に赴任し、光化学の旗を掲げた研究室をメンバーの皆と一緒に展開し、途中で2年間の副学長(研究担当)を含めて、19年間勤務し、1994年に定年退官いたしました。

定年を迎える時点では、私は化学、とくに光化学の経験を活かしたいと考えておりましたが、香港科技大学の故平岡弘之教授からの客員教授のお招き以外には、予定もありませんでした。妻の芙佐子の、定年後は、捉われずに、好きに過ごしたらという言葉に甘え、今日まで過ごして参りましたが、香港のあと、さまざまなご縁で、いろいろな仕事をさせて頂き、今日に至りました。とりわけ、長い間慣れ親しんだつくばでは、工技院物質工学研究所の時代から今日の産総研に至るまで、荒川裕則博士(現東京理科大教授)、矢部明博士、立矢正典フェロー(現名誉フェロー)にお世話になり、この3年半は、現在フレキシブルエレクトロニクス研究センター長の鎌田俊英博士にお世話になっております。

文字通り、いろいろなご縁で、光化学、光材料、有機エレクトロニクス、人工光合成などの研究プログラム等にお招き頂き、研究会などで、大学、研究所、企業の方々と交流する機会に恵まれ、多くの刺激を頂きながら、充実した時間を過ごさせて頂いております。恩師故島村修教授の講義には十分に時間をかけて入念に準備せよとの教えも、定年を過ぎてから、ようやく実ってきたことを実感しております。私の光化学の経験や知見が、研究者の方々のお役に立ち、さらに我が国の産業の展開にささやかでも貢献できれば、まことに幸いです。

旧制中学生のときに太平洋戦争の敗戦に遭遇した私たちの世代は、短い期間ですが戦前と長い戦後の時代を見てきて、終焉に近づきつつあります。化学は基礎と応用が表裏一体です。化学産業は、主に材料を他の産業に提供しているので、国内で電機、自動車、航空等の産業の活力が高いことが不可欠です。最近の産業の状況や東日本大震災への対応などを見ると、総体的なヴィジョンが必須などの敗戦の教訓をもっと活かせないかと感じております。

今回は、皆さま、本当にありがとうございます。この会は、事務局を担当された首都大の井上晴夫教授、実務を一緒にされた北大の三澤弘明教授と両教授の秘書の方々らのご尽力によるもので、厚く御礼申し上げます。また、心意気の高い妻の芙佐子にも、心から感謝する次第です。皆さま、どうぞお元気で。



徳丸克己先生(2012.5)



つくば第二 Clean Room 前で

(左から安達千波矢九大教授、筒井哲夫九大名誉教授、研究組合 CEREBE 専務理事、八尋正幸九大教授、筒井研究員、徳丸先生) (2013.7)

徳丸ご夫妻の写真
別途、原本（プリント写真）あり、
電子データなし

徳丸ご夫妻・つくばで (2012.4)

プロフィール

徳丸 克己 (とくまる かつみ)

1931 年 4 月 東京都 (当時: 東京市) 生

学 歴

1956 年 3 月 東京大学理学部化学科卒業

[卒業研究: 指導教官: 水島三一郎教授: コハクニトリルの分子内回転]

1961 年 3 月 東京大学大学院化学系研究科化学専門課程 満期退学

1961 年 12 月 理学博士: 指導教官: 島村修教授

[博士論文: Decomposition of peroxybenzoic acid in solution]

職 歴

1961 年 4 月 東京大学理学部助手

1965 年 10 月 東京大学理学部講師

1969 年 4 月 東京大学理学部助教授

1975 年 4 月 筑波大学化学系教授

1988 年 4 月 - 1990 年 3 月 筑波大学副学長(研究担当); 化学系教授兼任

1990 年 4 月 筑波大学化学系教授

1994 年 3 月 定年退官

1994 年 4 月 筑波大学名誉教授

1995 年 2 月 香港科技大学化学系客員教授

1995 年 台湾国家科学委員会化学研究推動中心客員教授 (精華大学)

1997 年 4 月 - 2002 年 9 月 放送大学客員教授

2002 年 4 月 (財)国際高等研究所フェロー

2007 年 独立行政法人 産業技術総合研究所 客員研究員

2011 年 4 月 組織改組により、独立行政法人 産業技術総合研究所 客員研究員
(フレキシブルエレクトロニクス研究センター)

受賞

1991 年 3 月 第 43 回日本化学会賞 (1990 年度)

1992 年 5 月 東京応化科学技術振興財団 第 3 回向井賞

2010 年 11 月 The Asian and Oceanian Photochemistry Association The Award
for Distinguished Achievements to the Asian and Oceanian Photochemistry
Association 2010

定年後に頂いた主なご依頼等

(主として公的機関から、ただし、大学等の機関の外部評価、
大学、学会等での講演は割愛；なお、収録は必ずしも完全ではない。)

1994. 4. 筑波大学名誉教授に。[定年に際し、当時の化学系長古川尚道教授と当時の研究室の櫻木宏親教授(当時助教授)、新井達郎教授(当時講師)らに、大変お世話になりました。]

1994. 1. – 1995. 12. 光化学協会会長 [現行の制度により、最初に選出された会長；会長就任の3か月後に定年を迎えたため、下記の常任理事の方々には大変お世話になり、とりわけ事務局担当には、かなりのご負担をおかけしました。故佐藤博保教授(当時：三重大)、城田靖彦教授(阪大工)、朴鐘震所長(川村理研)、藤嶋昭教授(東大工；会誌担当)、宮仕勉教授(東北大理；事務局担当)]

1986–2005 年度 通商産業省特別プロジェクト「光反応材料」推進委員長：故田附重夫教授、のちに入江正浩教授；評価委員長を務めた。評価委員会の中には：故堀江一之教授、増原宏教授、柏木電総研所長、須田織工研所長ら [非常に興味深い内容の研究で、評価委員会には、各委員が熱心に参加。とりわけ、当時繊維高分子研から通産省に出向して、このプロジェクトを担当しておられた関隆広博士(現名大教授)らに、しばしばご足労頂き、お世話になりました。]

1991–1997(?) 年度 通商産業省大型プロジェクト 先進機能創出 (ACTA)：当時の工業技術院物質工学工業技術研究所の方々からのご依頼で委員長を務めた。委員の中には、故佐藤博保教授ら。

1991–1995 年度 JST さきがけ 光と物質 総括：故本多健一教授；領域アドバイザーを務めた。[研究者には：石川満、石原一、井上佳久、川崎雅司、小島秀子、池田富樹、秋山英文、玉井尚登、中谷和彦、西原寛、藤井正明諸教授ら；研究者をこの主題のもとで自由に研究させる「本多牧場」方式。当時若手の研究者諸氏の今日までの連携は着目に値する。]

1994–1998 年度 科学技術振興調整費 超薄膜設計技術の開発に関する研究 代表故新井敏弘教授(筑波大学物理工学系) 評価委員主査を務めた。

1994–2003(?) 年度 筑波大学先端学際領域研究センター(TARA) 運営協議会委員を務めた。[設立準備をされた南日康夫副学長(研究担当)、古川尚道教授(後

にセンター長)にとりわけお世話になりました。]

1995. 香港科技大学化学系客員教授 [高い研究活力。この時点で、情報伝達はすべて電子化。とりわけ、故平岡弘之教授にお世話になりました。]

1995. 台湾国家科学委員会化学研究推動中心客員教授 (精華大学) [とくに、精華大学の廖俊臣 (Liao, ChunChen) 理学院長兼化学系教授 (後に行政院国家科学委員会副主任委員) と夫人には、親しくお世話になり、同教授の研究室出身者の方々の結婚式にまで参加させて頂き、その途上、台湾をご案内頂き、また台湾のいろいろな面を見せて頂きました。]

1996. 10. -2001. 9. JST ERATO 光不斉プロジェクト 井上佳久教授: 評価委員会主査を務めた。 [新分野の組織的開拓]

1995-2001 年度 CREST 単一分子・原子レベルの反応制御 総括: 山本明夫教授: アドバイザーを務めた。 [研究代表者には: 入江正浩、青山安弘、梶本興亜、藤田誠、齋藤烈、大橋裕二、土田英俊諸教授ら; しばしば小規模の研究会に参加。田村亘弘技術参事は、研究成果を企業研究者初め多くの方々のに活用できるよう、交通の便利な品川駅の近くのコクヨホールで2日間にわたるシンポジウムを企画。会場外のビデオ会場にも参加者が溢れるほどの優れた企画、実行力に敬服。同氏は、その後 SORST の化学系研究の技術参事も担当され、いろいろなプロジェクトを横断するシンポジウムを企画、開催され、とくに企業研究者に好評で、国費による JST の研究成果の企業への還元に尽力された。]

1994-1996 年度 (?) 凝縮相における反応のダイナミックスの理論的研究 工技院物質工学材料研究所 立矢正典博士; 評価委員を務めた。

1997. 4. - 2002. 9. 放送大学客員教授: TV の講義を一本担当。 [お招き下さった平川暁子放送大学教授にお世話になりました。また、デモンストレーション、展示資料の借用等で、下記の方々にお世話になりました。筑波大: 櫻木宏親教授; 工技院 物質研: 荒川裕則博士、村田重夫博士、南信次博士; 阪大: 城田靖彦教授; 九大: 入江正浩教授; 住友化学筑波研: 中園明子博士、土居秀二博士; Univ. Leuven: Prof. F. C. De Schryver; 石川県輪島高校: 日吉芳朗教諭; 住友化学、東レ、富士フィルム; 三菱化学を始め多くの方々。]

1997-2006 年度 科学技術庁 COE 育成事業: 光反応制御と光機能材料 (PCPM)

工技院物質工学研究所/産業技術総合研究所 立矢正典博士、荒川裕則博士らが推進；評価委員長を務めた。（なお、副委員長は：F. C. De Schryver 教授）[多くの方々、とりわけ、立矢正典フェロー（現名誉フェロー）、荒川裕則部長（現在東京理科大教授）、矢部明博士にお世話になりました。]

1998-2002 年度 CREST 分子複合系の構築と機能 総括：櫻井英樹教授；1996 年度発足の本 CREST の外部評価委員を 1998 年度から務めた。[研究代表者には：堂免一成、福住俊一、小夫家芳明、清水敏美、戸部義人、田中晃二、中西八郎諸教授ら] 2011 年度：追跡評価委員主査を務めた。副査には、会社の研究関係の役員とフェローの 3 名と大学名誉教授 1 名をお願いし、産業界からの視点を入れた報告書を作成し、最後の特記すべき事項で、CREST のいくつかの課題を指摘した。<<http://www.jst.go.jp/kisoken/crest/evaluation/follow/bunya14.pdf>>

1999-2001 年度 科学研究費 特定領域研究 (B) 分子連鎖配列系のコヒーレント光化学反応とその制御 代表：北大工山崎巖教授 [とくに、山崎巖教授にお世話になりました。]

2001.10.-11. International Symposium on Organic Electronic and Photonic Materials and Devices (ISEP'01), Osaka, [とくに、城田靖彦教授にお世話になりました。]

2001-2006 年度 科学研究費 特定領域研究 光機能界面の学理と技術 代表：藤嶋昭教授；事務局：瀬川浩司教授；評価委員を務めた。[班会議にしばしば参加。大きな組織力に感心。藤嶋、瀬川教授、班長の方々、評価委員の故本多健一名誉教授を始め、多くの方々にお世話になりました。]

2002 年度 国際高等研究所フェロー [とくに、岡田益吉副所長、新井輝隆事務局長、事務局メンバーにお世話になりました。2003 年のシンポジウムには、故本多健一名誉教授を初め、多くの光化学関係の方々に大変お世話になりました。改めて、御礼申し上げます。]

2002-2006 年度 科学研究費 特定領域研究 強レーザー光子場における分子制御 代表：山内薫教授；評価委員を務めた。

2002.3.-2007.3. 国際共同研究(ICORP) エントロピー制御 代表：井上佳久教授ら；評価委員を務めた。

2003-2009 (?) 年度 筑波大学学際物質科学研究センター（白川英樹名誉教授のノーベル賞受賞記念に創立）：運営協議会委員を務めた。[とりわけ、創設時のセンター長赤木和夫教授（現在京大）にお世話になりました。]

2005-2009 年度科学研究費 特定領域研究 次世代共役ポリマーの超階層性制御と革新機能 代表：赤木和夫教授；事務局：河合壮教授；評価委員を務めた。[班会議の討論とともに、若手研究者の育成が印象的。とりわけ、赤木和夫、河合壮、金藤敬一教授らにお世話になりました。]

2007-2010 年度科学研究費 特定領域研究 フォトクロミズムの攻究とメカニカル機能の創出 代表：入江正浩教授；評価委員を務めた。[企業在籍経験研究者の主題に対する集中度の高さに感心。とくに、入江正浩、池田富樹、横山泰、関隆広教授らにお世話になりました。]

2007-2010 年度 科学研究費 特定領域研究 光—分子強結合場の創成 代表：三澤弘明教授；事務局：村越敬教授；評価委員を務めた。[班会議での活発な討論；プラズモン研究会への発展が顕著。とりわけ、三澤弘明、村越敬、益田秀樹、山田淳教授らにお世話になりました。]

2008-2012 年度 科学研究費 新学術領域研究 高次パイ空間の創発と機能開発 代表：赤阪健教授；事務局：安蘇芳雄教授；評価委員を務めた。[とりわけ、赤阪、安蘇教授らにお世話になりました。]

2009-2013 年度 最先端研究開発支援プログラム (FIRST) スーパー有機EL デバイスとその革新的材料への挑戦（略称：OPERA）代表：安達千波矢教授；アドバイザーボードメンバーを務める。[基礎と応用の連携、産業界との密接な連携に感心。安達教授を始め、研究室の方々にお世話になっております。]

2010-2016 年度 JST PRESTO 人工光合成 総括：井上晴夫教授；International Advisor を務める。[各研究者との緻密な討論や研究者間の共同研究。とりわけ、井上教授、参事、秘書、評価メンバーの方々にお世話になっております。]

2012-2016 年度 科学研究費 新学術領域研究 人工光合成 代表：井上晴夫教授；事務局：民秋均教授；評価委員を務める。[とりわけ、井上、民秋教授らにお世話になっております。]

死や大きな怪我に近かったとき

1940 年 2 月 小学生。現在の東京都大田区（当時は、東京市大森区の表記）に在住、風邪をこじらせ、枕元での母の「この子は死んでしまったのかしら」という声を聞く。

1942 年 4 月 18 日(土) 太平洋上の航空母艦から発進した米軍の中型爆撃機 B25 十数機が東京を襲撃。航空機の殆どは日本を経由して、中国本土へ。土曜日で、昼に小学校(当時は国民学校と呼ばれた)の授業が終わり、下校時に突然空襲を知らせるサイレンが鳴り、米軍機が近くを低空で飛行し、急いで避難。

1945 年 2 月中旬 旧制の中学生。米軍の硫黄島（当時東京都下）攻撃の際に、米軍の航空母艦から発進した艦載機群による大空襲。超低空から、獲物の日本人市民を求めて飛行する操縦士の横顔をすぐ近くから見る。正面から見られたら執拗な機銃の攻撃を受けたところ。硫黄島では、本土への米軍の侵攻をできるだけ遅らせるための死闘が行われたが、その後、硫黄島からは戦闘機による本土の襲撃が行われるようになった。

1945 年 4 月 4 日早朝 米軍機により約 10 個の爆弾が数百メートル離れた所に落下。大音響、爆弾が落下するときの特有の空気の「摩擦」音。思わず、地面に身体を伏せ、眼と耳を手で覆い、爆風に備えた。爆弾は、幸いに沼を埋め立てた柔らかい土地に落下したので、すべては爆発せず、爆風による家屋の損傷にとどまった。

1945 年 4 月 15 日深夜 米軍の B29 爆撃機百数十機による東京南西部(城南地域)への夜間の低空からの大空襲。最初に人口と家屋の密集地を焼夷弾等で攻撃。そこで火災に遭い、比較的家屋の少ない地帯、とくに池上本門寺の境内の森に多数の人々が避難したところを攻撃。父が数年前に入手した家は、米軍により焼かれた。また、直ぐ近くの家の子どもの数名は避難中に爆弾の爆発により殺害された。本門寺境内では、多数の死者があり、その多くは火葬にできずに公園内に土饅頭として葬られ、それが撤去されたのは、戦後数年を経てからであった。母と弟妹はすでに地方に疎開していたので、父とともに近くの身内の家に避難し、その状況は長い間続いた。なお、その約 1 か月前の 3 月 9 日夜には、東京の下町の大空襲で、一晩に 10 万人以上の老人、乳幼児を含む市民が焼き殺された。

1945 年 5 月 25 日夜 寄寓先の家にナパーム型の焼夷弾が落下。屋根や庭で火の手が上がる。これは、小型の焼夷弾を約 50 個束ねたもので、地上の少し上で束がほどけて、焼夷弾が個別に落下する。焼夷弾はナパーム型、すなわち粘性の高い油脂が家屋や人体に付着して長い間燃える油脂が燃える型である。幸いに、近所の人々の尽力で消し止めることができた。その際、焼夷弾を包んでいた金属片が腕にあたったが、多分一回屋根に当たったあとであつたらしく、また外套を着ていたので、少し痛かった程度で済んだ。その夜空襲に備えて、勤務先に同僚とともに宿泊していた父と会いたくなり、電車は動いていなかったが、一部現在の JR の線路で品川付近の川を渡り、途中から動き始めた電車に乗って、父に会った。勤務先の近くの知り合いのお宅で、当時はすでに通常では入手できなかった白米のご飯をご馳走になったことは忘れられない。

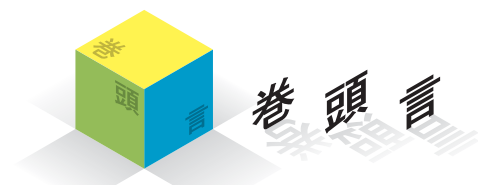
1945 年 7 月 母と弟妹の疎開先の茨城県の水海道を訪ねる折のこと。当時、常磐線電車は松戸までで、取手には、乗車券を入手しにくい常磐線の列車を利用。ただし、時刻表からはかなり遅れて運行されていた。取手駅で常総鉄道に乗り換え。常総鉄道は、当時は 2 時間に一本程度の運転間隔であつた。そのとき、一つ前の常総鉄道の列車は、米軍機の機銃掃射を受け、死者が出たが、常磐線との接続がよければ、それに乗車していた可能性があつた。

1950 年 10 月 大学 1 年生 病気のため、休学を始める。当時は、病で死に至ることも少なくなかった。

1959 年 10 月 大学院生のとき、同じ実験室の大学院生が仕込んだ実験で、爆発と火災が発生し、装置を固定していた鉄製のスタンドのクランプの破片が飛来。私は、当時は眼鏡をかけていなかったが、その数分前に、気になってかけた、透通しの防護用メガネに、その鉄の破片があたり、メガネが破損し、眼の周辺に軽い切り傷を負った。実験室での防御用メガネの必要性を悟らされた機会となった。

1967 年 8 月 仕事の打ち合わせのため、同僚の車で移動中、当時の甲州街道で、ゆるい上り坂を走行中、上から坂を下りつつあつたトラックと衝突。幸いに、トラックが早めに気が付いて、ブレーキをかけてくれ、しかも空荷であつたので、こちらの車の前方のエンジンにめり込んで停まってくれた。そのおかげで、ごく僅かなかすり傷程度で済んだ。山のようなトラックがめり込んできたときは、これで終わりかと思い、家族のことを思い出した。調べに来た警官によく無事だったと言われた。

1979年9月30日夜 日仏コロキウム (le colloque franco-japonais) が固体物理、核物理、光化学、法学、文学等の分野について、フランスで開催されることになり、それに出席する多くの日本人研究者が当夜成田発のエール・フランス機に搭乗。光化学分野の代表の故本多健一教授は打ち合わせのため、すでにフランスに滞在され、長倉三郎、田中郁三両教授も、別の仕事をかねて赴かれたので、この航空機には、故松浦輝男、故坪村宏、松尾拓、臼井義春の諸教授と私が搭乗。離陸直後、上昇中に、爆音とともに、左側の第2エンジンから出火。航空機が水平飛行に入る前の上昇中のエンジンのトラブルは、しばしば墜落につながるもので、これが最後と覚悟した乗客も多かった。幸いに、航空機は成田に引き返し、地上に駐機のままで遅い夕食をとり、近くのホテルに宿泊。この会議に参加のため、つくばから一緒に来た固体物理の筑波大の長澤教授と同室。この事故は、直ちにテレビやラジオで報道され、ホテルから自宅に電話したときは、家族はすでに事故を知っていた。もしも、この航空機が墜落したときには、日本中で非常に多くの教授の席が空いたことになった。その後、エンジンの取替えに時間を要し、翌10月1日の午後ようやく離陸し、当時はアラスカ経由であったので、夜遅くにパリに到着し、空港で本多教授、故 Jean Kossanyi 教授、Jean Rigaudy 教授に会い、市内のホテルに移動した。因みに、当時は航空機のエコノミークラスでは、アルコール性の飲み物は有料であったが、この航空機では、遅れたお詫びで無料となり、途中から飲み物が不足しはじめ、シャンパンやワインを隣同志で分けて飲んでほしいと要望されたが、パリに到着したときは、搭載していたシャンパンやワインはすべて飲み干されていたとのこと。元来は10月1日の夕方にレセプションが用意されていた由であったが、それには間に合わず、レセプションも少ない人数で行われた由であった。翌朝のパリ市内でのすべての分野の合同の開会式には多数が参加。筑波大からは、たまたま、固体物理の長澤教授、核物理の三雲教授夫妻と私が参加し、無事を喜んだ。会場には、評論で活躍した加藤周一氏の姿もあった。



大競争時代を生き抜くために

徳丸克己

Katsumi TOKUMARU

筑波大学 名誉教授、産業技術総合研究所フレキシブルエレクトロニクス研究センター 客員研究員



1990年代後半、大型研究費としてCRESTが発足した頃、研究費の財源には、国債もあてられるので、後年その成果が産業化され、その収益が税金として国に納められないと赤字国債になってしまうという意見をしばしば耳にした。化学産業は、製品を直接に市場に出すよりは、もっぱら他の産業に素材を提供しているのだから、我が国の化学関係の教育や研究は、化学産業からの素材を利用した我が国の産業が国際的にトップクラスの収益を挙げ、それが国税の形で納められ、その結果、研究費はもとより我が国の財政が廻ることが暗黙の前提となっていたといえる。しかし、近年、新興国における大規模な製造の加速と欧米における斬新な技術による製品の登場に伴い、電機をはじめ、我が国の多くの産業の構造が急速に変化し、製造業の収益も、また、それによる税収も低下している。企業が当面の業績向上のために、ある分野をカットするなど、研究者が能力を十分に発揮できない環境に置かれると、有能な研究者は海外からハンティングされ、培った技術の基盤は、容易に海外に流出している。化学産業は差別性の高い材料を、以前にも増して海外のメーカーに提供し、また近い未来の課題にも対応しつつあるように見える。しかし、産業全体として、生産だけでなく、開発も海外シフトする現在、時代の急激な変化に対応できる、ものづくりに独創的で差別性の高い価値を創出した、収益性の高いビジネスモデルの創出が急がれている。

昨2011.3.11の震災とその対応、さらに近年の国際的なきびしい競争下における我が国の産業の状況は、筆者には、旧制の中学生であった当時の太平洋戦争の敗戦の頃を思い出させるものである。震災の被災地では、その地域の行政担当者らは懸命の努力をし、被災地内の互助や被災地外からの救援なども進めた。我が国では、しばしば、ローカルにはどうにか行くものの、しかし、全体としては、総合的な視点とそれぞれを集積活用する活力がさらに欲しいという印象である。第二次大戦の敗因については、いろいろ見解はあるが、対戦国に比べて、広い視野に立った総合的な判断力による戦略と推進力の不足にあったと言えよう。これに関連して、例えば、歴史を含めての情報の不足、自由な議論を妨げる独特の風土、科学技術の力の不足とその軽視、過去の成功体験への過信、等々。このような課題は、様々な分野で、現在もなお引き続いているように思えてならない。

筆者は1990年代中期、中国に返還直前の香港の大学で客員教授を務めた折に、大学院生が学位取得後、地元には製造業が乏しいので、地元の金融業界や海外の研究機関に職を求めるのを見て、理系の教育における製造業の意義を改めて痛感させられた。大学院生や若い研究者の芽を伸ばし、広い国際的な推進力を持てるようにするには、独創性の高い、視野の広いリーダーが必要であるとともに、現状の産業構造の変化の認識と国の限られた経費の有効活用の視点が不可欠であろう。さらに傑出した人材が輩出するのは、個人の資質と精進によるところが大きいから、水を得た魚のように、その能力が適切な時期に発揮されることに意義があるので、それには、束縛の少ない自由な議論のできる環境が必要であり、我が国のある種の風土の変革を必要としているのではなかろうか。

流儀ということ

徳 丸 克 己

化学の学習の進め方には、いろいろな流儀があるということを淡々と教えて下さったのは津田栄先生であった。筆者は戦争中に中学生となり、戦後間もなくの学制改革で同じ学校に居ながら新制高校生となった頃のことである。当時身分は非常勤講師ではあったが、たしか週の半分以上を教えに来ておられた先生は、あっさりと元素と単体・化合物の話をされた後、ここから先の細かい考え方にはそれぞれ流儀というものがありますということを話された。流儀というのは、お茶の何々流あるいは生け花の何々流というようなものであり、どれがよくどれが悪いというのではなく、それぞれの好みであるという話をされた。たしかに、先生の著書、“基礎無機化学”(裳華房)にも“ボイル(ロバート)は元素という語を単体と同じ意味に用いている。今日でも元素と単体とを区別しない流儀の人も多い”と記しておられる。

この話は印象的であった。いまでも同年輩の人々と科学の教育の問題などが話題になるとき、この流儀ということを知ったという話をすると、多くの方々からずいぶん立派な先生に習ったのですねと言われることが多い。

化学のいろいろな課題について、正しい正しくないという判断だけでなく、さらにいろいろの仕方を流儀として互いに認め合い寛容でいられるためには、化学の本質そのものについての深い理解を必要とする。何が大事かということがわかっていなければ好みに任せるということができないからである。

理科の教育のカリキュラムは、見かけ上世界中どこでもよく似ているが、しかし、その扱い方には科学の先進国とそうでない国とではものすごい違いがある。このことを指摘してくれたのはある友人である。ちょうど先年、国際バカロレア(I B)の理科教育会議をわが国で行うよう要請され、筑波大学で開催するために、筆者が実務の世話人として、その打合わせと現場の視察に出かけな

ればならないときであった。その友人は時間が惜しいと思うでしょうが見るだけのことはあると激励してくれたが、ヨーロッパのすぐれたI B校を訪問し理科の授業を見せてもらい、先生方と話し合う機会はまさに友人のすすめ以上のものであった。

そこでは、何と生き生きとしかもものびのびと生徒たちが実験し、勉強していることか。この生徒たちもちろん、すぐれた大学に入学するためにはよい成績をとらなければならない。しかも、ふだんの実験も成績の20%を占める。授業にはもちろん大卒の目標があるが、その進め方はわれわれから見て実に自由であり、しかも個々の生徒に応じてよく注意が払われている様子であった。

I B校では、週5時間の化学の授業の3時間を実験に費やすのが標準であり、実験を通じて化学を理解できるようにする。残り2時間がいわゆる講義ということになるので、何もかも教えるよりは大事なことを選んで教えて、はじめてその目的を達成できるはずである。

このやり方は筆者が教わった津田先生の流儀を思い出させる。筆者の通っていた学校は都心でアメリカ軍の爆撃により実験室は破壊されており、鉄筋の焼跡に応急の床を張ったような教室であった。それでも先生方は、調達された実験器具を利用して私たち各人に実験をさせて下さったり、あるいは時間の足りないときには、津田先生は試験管を使ったいろいろな供覧実験をされ、話は簡潔であった。

わが国の学校教育は、非常に固い枠の中で行う傾向の強いことがよく指摘される。他方、激動する世界の中ではとくに自由で独創的な発想とその発展が求められる。国際化に耐えるだけでなく、むしろその中でこそ一層能力を発揮できる多くの人材を養成するには、教育の場において深い見識に基づいた流儀が、一層尊重されることが重要であろう。

(筑波大学教授)

私の学生時代

人々の姿から学ぶ

— 学問のための大きな財産 —

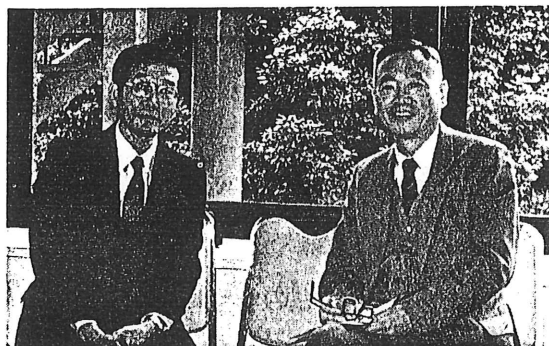
徳丸 克己 第一学群長(化学系)

私は戦後間もない中学生の頃に化学に興味を持ち、大学で教養課程修了後、理学部で化学を専攻した。化学教室では教官や先輩のみでなく技官や事務官や用務員など多くの方々のお世話になった。この3月にはそこに永い間勤務された女性の事務主任の退官記念の会で、92才の元技官や80才の元用務員、多くの名誉教授の方々など多数と会い、私の学生時代がそのままシフトした感じであった。

学生の時、化学反応の有機化学と物理化学の境界に興味を抱いた。その約20年後創立した筑波大学に大学院の担当は有機物理化学と記された割愛願を頂いて転任することになったが、当時はこの新しい分野が発展する前であった。そこで卒業研究は水島三一郎先生のところで振動分光法による回轉異性体の分子構造を、また大学院は島村修先生のところで過酸化物のフリー・ラジカル化学を研究させて頂いた。

水島先生(1961年文化勲章受賞)は分子の回轉異性体の存在を始めて提唱実証され、国際的評価が高かったが、戦中戦後のためにノーベル賞の機会が逸せられたのは残念であった。講義は分かりやすく、数式をほとんど使うことなく構造化学のエッセンスを今でも記憶に残る数々の雑談(これは重要!)と共に述べられた。今にして思うと、先生は時間を大変大事にされ、また学生の意気に対して寛容であるとともに、人柄の重要性を尊重しておられた。

大学院以降お世話になった島村先生は盛んになり始めた反応論の推進者の一人で、ちょうど学問の変革期で新しいテキストが内外ともに出版されていない時に、最新の文献を取り込み十数倍の時間をかけて準備された斬新な



講義は多くの学生を躍動し反応する分子の世界へと魅了した。先生はしばしば朝は7時台からコーヒーの香りとともに仕事を始められ、また東西の古典に詳しく、英文の論文の書き方についてきびしく指導して頂いた。

学位を頂き、また幸いに助手に任用されたが、講師の頃から次第に当時着目され始めた光化学の研究に進んだ。自然科学の研究は国際的であるが、その背景にあるのは個々の研究者の文化である。水島、島村両先生とも東西の文化や文化論に造詣が深く、今日の私の「教養」の形成に役立ったと思う。

1975年に本学に、教授として転任後若手のスタッフ、大学院生、卒論生の諸君と共に光化学の新しい領域を開拓してきた。私は学生の時以来その時々に応じて専門分野のこととともに多くのことを学ぶ機会を得た。今日の本学化学系の国際評価の基礎を築いた創設時の大饗茂先生からはその見識の高さを教えられた。また、国内外の多くの諸先輩や友人には啓発されつつお世話になり、トップクラスの方々の真摯で謙虚な姿はなによりの手本となった。また、国内外の管理職の方々が業務の間に時間を作り学問に専念し、国際的に活動する姿を垣間見た。持場持場の多くの立派な方々の姿に接し大切なことを身につけることは何よりも大きな財産の一つである。

「海行かば 水漬く屍 ー」

ー 再び坂道を転がり落ちないことを願って ー

理 事 徳 丸 克 己

(筑波大学 名誉教授)

昨2009年初夏に、私の筑波大定年退官15周年記念に開催された研究室の同窓会の席上で、近況を述べ、併せて、少年時代に戦前の束の間の東京の繁栄を見て、中学生のときに太平洋戦争の敗戦とそれに伴う価値観の大変動を経験し、今や日本人男性の平均寿命に近付きつつある世代の私が伝えておきたいこととして、「私が体験した七十余年(昭和58年間弱+平成20年間強)」と題する話をし、その中で「私がつねづね残念に思っていること」を述べた。当日、特別にゲストして参加して下さったある著名な教授からこの話を文章化することを強く勧められた。さらに、去年は、私より2歳年長でやはり戦時中に中学生であった作家の津本陽氏が勤労働員中のことを米軍の空爆の体験も含めて、日経新聞12月の「私の履歴書」に詳しく執筆され、また私と同年の山田洋次監督が映画「母べえ」で、戦前から戦中にかけての状況を描いておられるのを見て、改めて、決して愉快ではなかった頃を思い出しながら、本稿を執筆する決心をした次第である。

一言で言うと、昭和の時代、坂道を転がるように、戦争と破滅の道を落ちていき、国家の名で、歴史上かつてないほどの多くの国民が無惨な死に追いやられ、戦後復興を果たしたものの、未だに国際的に十分な位置に達しているとはいえない。破滅の過程で、ほかの選択肢はとれなかったのか、途中で留まって国民の被害を少なくできなかったのか、またその過程で得た貴重な経

験は現在十分に活用されているのであろうか、という課題である。この冊子の読者のほとんどは戦争を体験しておられないので、抽象的な話ではなく、私自身の体験や見聞を記している内に、すでに適切な枚数をかなり超えてしまった。そこで、今回は、太平洋戦争の末期近くまでで一旦筆をおき、来年続きを執筆させて頂けるよう、健康であるようにと願っている次第である。

昭和モダンから日支事変へ

私が生まれた1931(昭和6)年は、東京市(当時は、現在の京都や大阪のように、東京府の中に東京市があった)が1923年の関東大震災からの復興宣言をした1930年の翌年で、いわば昭和モダンの時代にあたる。当時わが国は都会と地方の農村との所得の落差が大きく、さまざまな悲劇があったが、大都会は一応の繁栄を楽しんでいた。しかし、私が誕生して間もなく秋に満州事変が勃発する。さらにその5年後の大雪の1936年2月26日に高橋是清大蔵大臣らを暗殺する2.26事件が起こる。当時、東京市のはずれの大森区(現在の大田区の一部)に住んでいたが、大雪で停電したその夜に蝋燭の灯が揺れていたことを記憶している。そうして、翌年の1937年7月7日、北京郊外の盧溝橋で、日本軍と現地の中支那軍が衝突し、いわゆる日支事変が起こり、その後泥沼のような状況に陥っていく。

日支事変が起こって間もなくの9月のある朝、母が玄関で赤い紙の電報を受け取っ

た。父への召集令状であった。当時は天皇陛下の御為に、喜んで戦地に赴き、命を捧げるべしとされていたので、父の出征を祝う幟が沢山届けられ、玄関に立てられていた。当時私は6歳で、出征という事態を十分に把握できない年齢であった。ともかく、召集された地に夜行列車で出発する父を、母、妹、弟、祖父母や親戚たちや父の知人たちと東京駅で見送った。すべて、表向きにはお祝いの行事で、万歳が叫ばれたが、後日母からは万歳を聞かされるのは、非常につらかったなど、いろいろな心痛を聞いた。当時満37歳であった父は、健康上の理由で召集が解除され、帰宅し、職場に復帰した。私は当時のことを断片的にしか覚えていないが、それも後に米軍の爆撃で焼かれてしまった写真のアルバムの記憶による点もあるだろう。もし、父があのまま出征し、文字通り、天皇陛下の御為に命を捧げるようになったならば、私の人生も大きく変わってしまったことと思う。その後多くの人々が召集され、神社や駅などで「大日本帝国万歳、天皇陛下万歳、OO君万歳」と叫ばれて、出征していき、しばしば還らぬ人となり、靖国神社に神として祀られた。

1939年頃であったか、小学校の修身の時間に、初めて「現人神（あらひとがみ）」である天皇には、われわれより少し若い皇太子（現在の天皇）があり、神様の子として、学習院という学校に通っているということを習ったが、神様の子供はどのようにして学校で勉強したり人間の子供たちと遊んだりするのか不思議な気がして、皆怪訝な顔をしていたのであろう。先生は生徒たちのそのような雰囲気を感じてか、皇太子でも遊んでいて転ぶことはありますよと付け加えた。もちろん、当時は「源氏物語」や「問はずがたり」を読める年齢ではなかったので、天上人の実態を知る由もなかった。当時の小学校に設けられていた天皇、皇后の写真（御真影：ごしんえいと呼ばれた）を納める奉安殿（ほうあんでん）という小さな祠のような建造物がコンクリート製になり、生徒

たちは学校の行き帰りにその前で脱帽して、神である天皇に最敬礼をした。

映画「母べえ」にも描かれているように、当時は非常時に贅沢を慎しめ等とのかけ声が高く、私の知っている範囲でも、新聞が些細なことを取り上げて、「非国民」の行動を糾弾して、針小棒大に煽り立てていたようで、そのようなマスコミの様子は現在も同様といえる。例えば、知人の家の大学生は友人たちとの近郊の旅行を、ある有力大新聞の記者に非常時中に相応しくないと書き立てられた。大学は、やむを得ず、普段真面目に勉強している彼らに勉強を止めさせずに、しかしある程度の処分にしようであった。戦後、戦地から無事に引き揚げてきた本人は生前その有力新聞を絶対に購読しなかった由で、また一緒に処分された仲間の多くは、戦後産業界等で活躍された。多くの新聞の昭和初期以来の記事を見れば、いかにそのときどきの時流に乗って、ある人々を非難して記事にしているかを見ることができよう。

「皇紀2600年」の祝賀

1940年には、当初東京で開催が予定されていたオリンピックは前年に欧州で始まった戦争のために中止となったが、全国を挙げて「皇紀2600年」が祝賀され、東京では天皇列席のもとに記念祝典が催され、その花電車を都心で見た。皇紀2600年とは神武天皇の即位から2600年と称するもので、そうすると、その即位は西暦ではB.C.660年となり、中国大陆に伝わる文献とは整合していないことは識者の間ではかなり知られていたようであるが、長引く日支事変の中で軍事色のますます強まる国家のある流れで、行事が行われたのであろう。当時は「万世一系の天皇を戴く世界に冠たる神国」大日本帝国と教えられたが、要するに、国際的な観点で比較をするのではなく、一方的に独自性を強調したものであった。私たちは当時、天照大神は実在する証拠があるかを議論して、先生に教室の床の上に正座さ

せられて、論じてはならぬことと叱責されたものであった。本誌の若い読者は不思議に思われるであろうが、わずか70年前の話で、現在の日本にもそのような客観的な議論を阻む風土がなくなったとは言い難いきらいがある。東大の印度哲学の教授であった中村元氏は、恐らく戦時中に執筆され、戦後間もなくに出版された著作で日本人の思惟方法を諸外国と比較され、印度の方がより客観的な思惟をすることを指摘されている。われわれ「少国民」と呼ばれた小学生も当時は宮城と称した皇居の前の広場に勤労奉仕に狩り出され、広場の砂利の山のある地点から別の地点に運ばされた。多分多くの小学生を狩り出してそれを繰り返していたのではないかと想像する。

当時、技術者であった一人の叔父はすでに召集されて中国大陆におり、祖母は折角大学まで行かせて育てても一銭五厘（切手の価格に相当）で戦争にとられてしまったと、「非国民」として非難されかねない嘆き方をしていた。しかし、東京に住む少年から見ると、大都会は東の間の繁栄をしていたと思う。銀座通りには夜店が並んで人々が賑わい、都心の店々には美味しい菓子や料理があり、子供には縁がなかったが、若い叔父や叔母たちは都心の映画館で上映される「駅馬車」などの欧米の映画を楽しみ、叔父のプレーヤーからはジャズやタンゴなどの曲が流れていた。「上海パンスキング」という芝居で歌われるダミアのシャンソン「暗い日曜日」も当時聴かれていた曲であった。また、国の産業としては、政府が明治以来輸出産業として力を入れていた上質の生糸の生産は、当時最高に達し、主として米国に輸出されていた。

中国大陆の戦争は長引き、日本は当時ABCD包囲陣により取り囲まれた状況となった。ABCDはそれぞれ米国、英国、中国、オランダのことで、米、英、蘭の3国はアジアに植民地を持ち、權益を得ていた。米国は当時フランス領のインドシナ、とくに現在のベトナム地域から、中国軍を支援し、日

本軍はこのルートを開鎖させたい目的で、現在のベトナム地域に進駐し、それが日本と米国等との関係の悪化を招いた。米国の外交政策は、幕末のペリー率いる黒船の砲艦外交に見られるように、人種差別も含めて、相手が自分より弱いと見れば、つねに高圧的であるのは、最近の中東との対応にも見られる通りで、日本が中国大陆から完全に撤兵しないかぎり、日本への石油の輸出を禁止するとし、日本は、このままでは、立ち行かなくなる状況に追い込まれていた。

太平洋戦争の勃発

1941年12月7日は風のない明るい晴天の日曜日で、父が久しぶりにわれわれ子供たちを連れて、叔母も誘って鎌倉の散策に出かけた。北鎌倉から円覚寺、建長寺を訪ね、長寿寺の足利尊氏の墓にも寄る。当時、尊氏は「逆賊」と教えられていたが、父は非常に微妙な言い方で、彼はなかなかの人物であるとつぶやいた。当時「国史」と称した授業では、多くの人々の生活の安定、向上とは関係なく、天皇を取り巻く公家の利益の側に立てば「忠臣」、そうでなければ「逆賊」とされていたのであった。日曜日なので、近くの横須賀の水兵たちにもすれ違いながら、鶴が岡から由比ガ浜に出て、浜辺の海浜ホテルで父が昼食をご馳走してくれた。大学卒業後間もなく徴兵された長兄の無事を祈って好きなものの「絶ちもの」をしていた叔母は肉類ではない料理を摂った。ホテルのロビーには外国人たちもいて、休日を楽しんでいる様子であった。なお、この木造のホテルは戦後米軍に接収され、米兵の煙草の不始末で焼失した。

翌12月8日の早朝、まだ寝床にいたわれわれはラジオの「本日未明帝國陸海軍は西太平洋において英米と戦闘状態に入れり。」という大本営発表のニュースを聞いた母の声で目を覚ました。母が父にこれは戦争が起こったことかと尋ね、こんな戦争をして大丈夫なのかと、当時「非国民」と言われかねないことを言うと、父が、天皇陛下が戦争

を始めるとお決めになれば、国民はそれに従うのであるという、尤もな応えをしているのが聞こえた。ともかく、いつものように学校に行き、校長先生の朝礼の訓話を聞いた。翌日の朝礼で、校長先生による天皇の開戦の詔書の奉読を拝聴した。「天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス 朕茲ニ米國及英國ニ対シテ戦ヲ宣スー」で始まり、「——東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス 御名 御璽 昭和十六年十二月八日」(いずれも原文のまま；なお、御璽とは大日本帝国天皇の公印のことである)で終わるものであった。ともかく、開戦の夜は空襲があるといけないというので、その準備をして床に就いた。

当時はすでに小学校は国民学校と呼ばれていたが、その10歳の少年とは違い、視野の広い大学生は実体を認識していた。2009年4月に日経新聞に「私の履歴書」を連載した元大蔵省、博報堂の近藤道生氏は、当時東大法学部の学生で、開戦の日、どうしてこのような戦争を始めてしまったかと残念になり、授業を受ける気にはなれず、中央図書館で先輩の学生と一緒に時計台から、街を眺めていると、その先輩がこの戦争でこの辺一帯はきっと焼野原になってしまうと言われた由である。

開戦以来毎月8日は天皇が宣戦の詔書を発布された記念日として、「大詔奉戴日」とされ、朝礼で宣戦の詔書の奉読を聞き、それから戦勝祈願のために学校から神社に参拝するようになり、またこの戦争は大東亜戦争と呼ばれた。開戦の約4か月後の1942年4月18日(土)の昼頃に突然、洋上の航空母艦を発進した米軍機による最初の空襲があり、土曜の半日の授業で帰宅の途中で空襲警報が出たときは、すでに米国の爆撃機が飛来していた。戦局の激化とともに、各地の戦死者が次第に多くなり、われわれ学童が沿道や学校のとなりの池上本門寺で無言の帰還をする「英霊」を迎える回数も多くなった。

中学校入学と戦局の激化

やがて、私は旧制の都立一中に入学し、電車を2回乗り換えて、麹町区(現在の千代田区の一部)永田町に通う。一中では、当時敵性語といわれた英語の授業も熱心に行われていた。当時私たちの習った英語はイギリスの英語で、たとえば、colourはアメリカではcolorと綴るが、一種の方言であるように習った。後日、私の大学院の指導教授は、欧州の非英語国はすべてイギリス英語を使用し、わが国は米国の植民地ではないからというので、論文にはイギリス英語の綴りを用いたので、私たちもそれに習った。また、教練の授業はあったものの、非常に心得た老練の先生によるものであり、ともかく学校は生徒を勉強させるのに熱心であった。音楽の梁田貞先生は、大正期に上野の音楽学校(現在の東京芸大)を卒業された声楽家で、「城ヶ島の雨」などの作曲家であったが、大正時代から一中で音楽を教えておられた。この方は、生徒たちにしばしば「海行かば」を歌わせた。「海行かば 水漬(づ)く屍 山行かば 草生(む)す屍 大君の 邊(へ)にこそ死なめ 顧みはせじ(ほぼ原文のまま)」という歌詞で、戦時にはよく合っていた。この先生は、多分大正の頃から「かば」というあだ名であり、歌詞には「かば」という発音が四か所あった。そこで、時として、「今「かば」というところを強調して歌った方がいます。私の耳は諸君よりよいので、それを確かに聞き分けました」と言われて叱られたりした。しかし、戦場の屍はともかく、間もなく老若男女の無惨な焼死体をご覧になる前であったので、観念的に「海行かば」を歌わせておられたのかも知れない。

1944年夏にそれまで「太平洋の防波堤」と言われていたサイパン島などのマリアナ諸島が米軍に占領され、多くの民間人が犠牲になった。その結果、日本本土は、これを基地とする当時のプロペラの大型爆撃機が往復できる範囲に入ってしまった。空襲による被害を防ぐために、都市からの住民の

疎開が叫ばれていたが、サイパンの陥落により、これが現実的な課題となり、それぞれの家族が個々に疎開するとともに、国民学校3年生以上の児童を集団として疎開させる学童疎開が開始され、夏の終わり頃に当時11歳で5年生のすぐ下の妹は、学校の担任の先生の引率で伊豆長岡に疎開した。伊豆長岡は以前から温泉のある保養地ではあったが、戦時中は、そこの旅館に大勢の児童が集団で収容され、温泉はあるものの、日常の食料にも不足し、生活の環境も悪く、妹たちは非常に苦勞を強いられた。また、当時小学生であった妻も疎開して、日本海岸の伯母の家に預かって頂いた。

この年の秋には、フィリピン近海で、米艦隊を標的とする特攻作戦が開始された。航空機に爆弾を搭載して、敵の艦船に衝突して、自爆して損害を与える戦法で、やむを得ない方法として立案されたようであった。以前は大学や高専の在学生には、徴兵が免除されていたが、1943年秋に文系の学生に対してはその免除の制度がなくなり、ときにテレビで映される当時のフィルムのように、10月1日に激しい雨の中で式が開催され、大勢の学生が軍に動員された。学徒動員と呼ばれるものである。当時大学生は同世代人口の数パーセント程度に過ぎない、いわばエリートであり、軍にあっても多くのことをこなした。しかし、航空隊に属した人々は、多数特攻作戦に参加させられる結果となった。

11月になると、サイパン等を発進した米軍のB29爆撃機による高空からの爆弾による空襲が始まった。戦闘機隼のメーカーでもある中島飛行機の武蔵野の工場や都心の官庁街や劇場街などが爆撃された。昼間、爆撃機のいくつも編隊が数千メートルの高空を飛ぶのが見えるが、当時の高射砲では弾が旨く届かない。戦闘機が攻撃を試みるが、爆撃機の外壁が丈夫であるので、弾丸が通らず、却って戦闘機が爆撃機に撃墜されてしまうことが多く、たまに爆撃機が被弾炎上して墜落する程度であった。さらに、

当時のプロペラの戦闘機では、高空に達するのに、2時間程度は要するとの話であった。開戦当時は、日本の戦闘機、とくに海軍の零戦の性能は、防御性能を除くと最高水準であったが、わが国の産業は強力なエンジンの開発で遅れをとっていたようで、高い馬力のエンジンを戦闘機に装備するのがなかなか難しかったようであった。

夜には、しばしば米軍機の襲来を告げる警戒警報や空襲警報が発令され、そのたびに人々は深夜起き出して、自宅の近くの道路や、あるいは防空壕で様子を見ていた。夜は寒く、警報が解除されても、睡眠の時間も不足しがちであった。

そのうちに、航空母艦から成る機動部隊がわが国の近海にまで来るようになり、母艦の戦闘機などの艦載機による空襲が始まる。1945年2月の硫黄島への侵攻に際して、二日間朝から夕まで艦載機の小型の爆弾と機銃掃射による攻撃が続いた。防空壕から覗くと、すぐそばの低空を老若の住民を機銃の獲物として求めて飛行する操縦士の横顔が見えた。当時操縦士に見られると、執拗に攻撃されると言われていたのも、急いで首を引っ込め、防空壕の中でその飛行機が戻ってこないようにと願っていた。硫黄島の守備隊は、司令官の方針のもと、きびしい条件下にも拘わらず徹底的に抗戦したので、米軍が硫黄島を占領するには、当初の計画よりもはるかに多くの日数を要したのは、知られている通りである。後日、硫黄島は本土への戦闘機の攻撃の基地となった。

米軍の司令官カーチス・ルメイによる日本の焦土作戦による戦災

1945年1月に米軍の新しい司令官となったCurtis E. LeMay (1906－1990；写真は、例えばインターネット上のWikipedia「カーチス・ルメイ」や「東京大空襲」で見ることができる)は低空からの焼夷弾の無差別爆撃による日本の焦土作戦を立案し、日本人の焼き殺しを図った。資料によると、当初こ

の爆撃は米軍の中で国際法に違反するおそれがあると指摘されたが、彼は日本では小さな町工場が住宅地に点在し、そこで軍需品を製造しているからとして、民間人の攻撃の必要性を主張して強行した由である。彼らは1945年3月9日夜から10日未明にかけてB29爆撃機約300機で東京の下町を低空から大量の焼夷弾で攻撃して、広い面積を焼失させ、一夜で老若男女約10万人を焼き殺した。なお、多くの市民から見て悪魔のようなルメイは、戦後航空自衛隊に関与したためか、1964年に当時の防衛庁長官の小泉純也氏（純一郎氏の父）らの推薦により勲一等旭日大綬章を授与されたが、これについては多くの議論がある様子で、昭和天皇も、通例の慣行には従わず、授賞には立ち会われなかった由である。彼は、ベトナム戦争の際には北ベトナムを石器時代に戻してやるとして北爆を主張したなど、わが国の市街地での殺戮の仕方や資料から見ると、人種差別主義者であったと思われる。

この空襲で安否が気遣われた下町の親戚は、焼跡を訪ねた母が移転先の札を見附け、地下だけ焼け残ったビルで暮らしていた家族を発見し、とりあえず幼女とその母親を自宅に連れてきて、二階の部屋で過ごしてもらうことになった。もう一組の遠い親戚は、現在までも行方知れずで、焼死させられたのであろう。前から疎開する予定であった母は、学童疎開をしていたすぐ下の妹、弟、若い妹の3人を連れて、疎開し、東京には、父と私が残し、隣に住む方が日常の世話をしてくれた。なお、父は当時都立の旧制の工業専門学校（現・東京都立工業大学）の校長を勤めていたが、前年に空襲が激しくなって以来、校長をはじめ全教員が交代で一日置きか二日置きに学校に宿泊して空襲の警備にあたっていた。この夜は家にいた父は赤く染まった空を見ながら、勤務先の被害を気にしていたが、その学校のかかなりの部分が焼失してしまった。

その後間もない1945年4月4日早朝に、家の付近に爆弾が投下された。前記の津本

陽氏も克明に記されているように、爆弾が落ちてくるときにヒュルヒュルという音を聞き、習ったように、地面に這いつくばり、眼と鼓膜を保護するために、両眼と両耳を両手で押さえる。やがて、すごい音が響き、爆風で廊下のガラスが飛び散った。

その後都内の城北地区への大規模の夜間の空襲が4月13日にあり、開戦前日に一緒に鎌倉に行った叔母は、結婚後住んでいた本郷の家を焼け出された。叔母の夫は、二度目の徴兵で北海道の部隊にいたので、叔母は二歳の幼児を背負って疎開して行った。

ついで4月15日の夜の城南地区の空襲で、とうとう我が家も焼かれてしまった。米軍の空襲の仕方は、まず私たちの家から数km離れた人工密集地に大量の焼夷弾を投下して、住宅とともに住民を焼き払う。深夜でも遠くの火災で、昼間のように、新聞が読めるほどの明るさになり、火災に伴う風がかなり強く吹きはじめる。ついで、焼夷弾の投下地域を拡大し、時限爆弾も併せて投下し、また機銃掃射する。一人でも多くの住民を殺害するためである。事実、近所のある家族の姉妹は避難中に時限爆弾の爆発に遭遇して一瞬のうちに犠牲となった。そうして、最後に、火災に追われた住民が避難してきた池上本門寺の森に大量の焼夷弾を投下して、かれらの殺害を企てる。このようにして殺害された人々で身寄りの不明の方々の遺体は、本門寺公園に土饅頭の形で急遽埋葬され、戦後二三年間はそのままであった。父と私は自宅の付近には居られないので、当時まだ残っていた田んぼの脇に腰を下ろし、火災の様子を見ていたが、祖父母の家の方には火が廻っていない様子であったので、そちらに避難し、その後長い間そこでの生活が続いてしまうことになった。3月に下町で焼け出された若い母親とその背中の幼女も、一旦本門寺の森に避難したものの、辛くも火を免れ、煙で目を腫らし、煤で顔を真っ黒にして、涙を流して泣きながら、辛うじて焼け残った町に降りてきて、われわれと遭遇した。

その後、東京は5月下旬に2回夜間の大規模空襲があり、そのうち25日は約470機による大規模のものであった。最初の夜は、日本軍により撃墜されたB29が、夜空に大きな火だるまのようになり、こちらに向けて落ちてくるように見える。翌日、友人と数キロメートル離れた畑の上に落ちた大きな残骸を見にでかけた。また、落下傘で降りた乗員を、近所の人々が無差別攻撃に憤慨して報復しようとしたら、憲兵に阻止されたとのことであった。上空からの大量の無差別殺戮は認められても、地上に降下した殺人者は捕虜として保護されるということであった。

その次のときは、上空から落ちてきた爆弾を覆っていた金属片が庭にいた私の腕にあたったが、一旦屋根で跳ね返された様子で、痛かったが、耐えられた。さらに、仮住まいの家の屋根や庭にナパーム型の弾が落ちて、火を噴いたが、幸い近所の方々の尽力で消し止めることができた。これは、小型の焼夷弾を50個位詰めた容器を上空で炸裂させて、小型の焼夷弾に入っているべっとりした油脂に着火させるので、火の矢が落ちてくる感じになる。私と同世代の野坂昭如氏原作の映画「火垂るの墓」で、小さい女の子が目撃する火の矢が降り注いでいる情景である。

この夜、父は勤務先に同僚とともに泊まっていたが、空襲の明けた朝、無性に父に会いたくなり、祖父母にことわって出かけた。交通は途絶しており、徒歩で都心に向かった。品川の手前では、第一三共の脇の川を越えなければならず、大勢の人々同様、鉄道の鉄橋を恐る恐る徒歩で越え、田町から辛うじて電車に乗れた。父の勤務先は東京の東側、荒川（その下流が隅田川）のほとりにあり、焼け残った校舎にいた父に会った。付近で焼け残った知り合いの家の女主人が「元気に、よくお出でになりましたね」と歓待して下さり、その夜は、とおきの白米を炊いた御飯と、これも貴重品の油で揚げた野菜の天ぷらをご馳走して

下さった。当時は、統制されていた米の配給はなくなり、かわりに大豆が配給され、多くの人々は米がわずかに入った大豆を食べていたので、白米のご飯は大変なご馳走であった。この文を書きながら、この方のご親切を改めてありがたく思い出す次第である。

戦時中、1943年末頃から当時の中学生や女学生が順次勤労動員にかり出された。これは、授業を中止して、工場等での軍需品の生産、働き手が出征した農村の農作業、不足したガソリンを補うための松根油をとるための松の掘り起こし、さらに家の密集地帯で、防火のために、あるブロックの家をすべて強制疎開させたあとの家屋の取り壊し作業等であった。私の通っている学校では、44年のある時期、あるクラスは風船爆弾の製造を手伝った。これは、和紙で作った大きな風船に爆弾を積み、常磐海岸から成層圏を偏西風に乗せて飛行させ、米本土の上に落下させるもので、当時米側にとっては予測しがたい攻撃のようであった。

1945年の初夏は、私たちは空爆の焼跡の整理に狩出されていた。ただし、ときどき学校に戻って短い時間であったが、授業を受けた。最初は日本橋の濱町で、この地区では、とくに明治座で、3月の大空襲で多くの人々が焼き殺されていた。われわれ中学生在が作業をするときは、焼死者の遺体は片づけられてあったが、現場にはまだ毛髪や焦げた衣服の切れ端が残っていることもあった。濱町の次は、有楽町界隈で、駅前の電気ビルの焼け残った地下に荷物を置き、付近を片付けたが、その間に絶えず空襲で作業は中断され、食べるものにも不足して、栄養状態も悪かったので、皆くたびれ果てていた。（未完）

「海行かば 水漬く屍 ー」

ー 再び坂道を転がり落ちないことを願って ー (完)

理 事 徳 丸 克 己

(筑波大学 名誉教授)

その前夜から敗戦へ

1945年3月末に母は私の二人の妹と弟とともに疎開し、私は中学生であったので、疎開に気が進まず、父とともに家に残り、近くにいる方が家のことを手伝って下さった。しかし、先に述べたように、この家は4月15日の夜に米軍の空襲で焼かれてしまったので、近くの祖父母の家で暮らしていた次第であった。母と弟妹は結局、母の学校時代の級友の方のお世話で、茨城県の水海道に疎開した。当時、水海道に行くには、上野から蒸気機関車の牽引する列車で取手まで行き、そこから常総鉄道で約1時間を要した。現在は、常磐線の電車は取手が終点であるが、当時は松戸が終点で、そこから先に行くには、列車に乗らねばならず、当時は鉄道の切符を入手するのが容易ではなかった。また、客車も爆撃でかなり焼失していた上、しばしば空襲があるので、列車の運行もかなり不規則であった。しかし、母たちを訪ねるために、どうやら入手した切符で、土曜日の午後に入野で列車に乗るが、しばしば客車ではなく、貨車(ただし屋根はあった)に乗らなければならないこともあった。貨車には女性も乗っていたが、夕方になっても電灯はつかず(元来灯火管制で

明るくはなかったが)、ずいぶん心細かったと思う。取手からの常総鉄道は当時2時間に1本くらいで、しばしば取手の駅で長い間待たなければならなかった。車輛は、自動車と小型の蒸気機関車の引っ張る列車の場合とがあった。あるとき、私の乗った列車の何時間か前の列車が走行中に米軍機の機銃掃射に合い、乗客が何人か殺害されたこともあった。しかし、ようやく水海道に着くと、そこは空襲警報が鳴っても空襲はなく、東京に比べると食料もあった。

水海道は鬼怒川と小貝川に沿い、江戸時代からその付近の米を集積、出荷した水運で栄えた町であった。そこでお世話になった母の級友は、女学校を卒業後上京して、大正末期から昭和の初めにかけて通った当時新設の学校で母と同級であった。その方は、旧家の出で、地域に知り合いも多く、母たちは大変親切にして頂き、おかげで無事に過ごすことができ、大変ありがたいことであった。母たちは当初、その方の実家の近くのたしか米屋さんの2階に住わせて頂いていたが、毎週日曜日の朝には、その1階で、その方の弟さんがキリスト教の日曜学校を開いておられ、子供たちが賛美歌を歌うのが聞こえた。

当時の地方でも、このようなことは行われていたのであった。ここでは、母は、どのようなルートからかは別として、いも類やときには鶏や兎肉を入手し、味噌も自分で作っていた。私はときどき週末に上野からかなりの時間をかけて母たちを訪ね、あわせて栄養の補給をしていた。なお、現在は、当時と比べて交通の便が格段によくなったので、上野―取手が電車で約40分、取手―水海道が電車で30分である。

さて、都立一中は、米軍の空襲で半分以上が焼失したが、昭和初期に建てられた鉄筋コンクリートの校舎であったので、その部屋の中が焼けた状態であった。当時、私たちは勤労動員で米軍の爆撃による焼跡の整理にかり出されていたが、ときどき整理先の調整が何かの都合で、学校に戻り、授業を受けることがあった。そのようなときに、化学の先生が原子や分子の構造の話をされたことがあった。たとえば、一言で言えば、原子核のまわりを電子がものすごいスピードで廻っていること。さらに、原子は容易には別の原子に変わらないが、放射線を出して別の原子に変わることもあり、また人工的に原子を壊変させる試みもあること。ウランのほとんどは質量数238であるが、わずかに含まれる質量数235の同位体に中性子を照射すると、ウランの原子核が2個の中くらいの質量の原子核に分裂するとともに中性子を発生すること、それがさらにこのウランの同位体の原子核に作用して、原子核の分裂を連鎖的に行うと、大量のエネルギーを放出するので、この過程を実現できると、高性能の「ウラニウム爆弾」を作れるので、強力な武器になることなど

を話され、印象に残る授業であった。

8月に入り、暑い日々が続き、6日に広島に「新型爆弾」が投下され、大きな被害が出たことが報じられたときは、これはきっと少し前に習った「ウラニウム爆弾」に違いないと思い、すでに米国が実用化してしまい、日本はこのような科学技術でも遅れをとってしまったのかと思った。開戦当時首相であった東條英機はいざとなったら国民は竹槍を持って米軍と戦えと鼓舞していたが、誰もそんなもので戦えるとは思っていなかった。

当時の新聞は、紙が不足していたので、現在の誌面の半分程度の大きさの「タブロイド版」と呼ばれる大きさで、最後は表裏の1枚ではなかったかと思う。新聞は軍の方針にしたがって戦意を高揚させるような記事を出していたが、8月の中旬に入るとトップの記事の様子が変わってきたことを感じた。たとえば、明治神宮か靖国神社に参拝する人々の写真があり、その脇に「国体護持を祈る」という見出しがついていた。少し前までの「必勝を祈る」などとはかなり違う。また、その頃、戦争がそろそろ終わりになるらしいという噂も耳にした。交戦国の米国、英国、中華民国の3国の代表がベルリンの郊外のポツダムで、7月26日付け日本に対して無条件降伏とそれに伴う数々の事項を要求したポツダム宣言(The Potsdam Declaration)について、日本政府は当初その受諾を拒否した。しかし、広島、ついで長崎への原爆投下、さらに不可侵条約を締結していたので安心していただスターリン率いるソ連が「漁夫の利」を得るために、米国大統領の勧めるままに、条約を破って、本土への爆撃や

満州、樺太、千島列島、さらに北方領土への侵略を開始した。後日分かったことであったが、そこで政府はポツダム宣言を急遽受け入れることとし、そのための条件として、「国体」、すなわち天皇制の維持を打診していたからで、新聞社はそのような状況を把握していたのであろう。

1945年8月15日は、朝から暑い陽射しが照りつけており、昼近くまで米軍機の襲撃に対する警報が出ていたと思う。前日からその日の正午にラジオで天皇の放送があることが予告されていた。もう戦争が終わるらしいという噂であったので、私は都庁の焼跡の片づけの勤労働員には行かず、家で放送を聞くことにした。当時は、ラジオの調子がよくなかったが、隣の家の方々もラジオが聞こえないので、一緒に聞きに来られた。正午からの昭和天皇の放送は、「ポツダム宣言の受諾、すなわち終戦の詔書」を直接に肉声で読まれたものであったが、雑音も多い上、今まで耳にしたことのない抑揚の発音で非常に聞き取りにくかった。しかし、とにかく、その内の一節「朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス」(原文のまま)の中の「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び」(ただし、現在の表現で示した)を聞き取ることができた。多分、それまで天皇自身のラジオの放送はなかったと思うので、初めて耳にした天皇の肉声であった。聞き取りにくかったので、長いように思ったが、正味4分あまりとのことであった。これで、4年弱前の1941年12月8日に、天皇の「天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有

衆ニ示ス 朕茲ニ米國及英國ニ対シテ戦ヲ宣スー」という開戦の詔書の発布で始められた戦争は、多くの国民の「天皇陛下の御為に」という努力も空しく、多くの日本国民を死地に追いやり、国を焦土として、人々に悲惨な生活を強いて、ようやく終わりを告げた結果となった。

この日は、非常に天気がよく、暑い日であった。縁側で屋根の庇に向けて立てた竿に蔓をからませて、日除けを兼ねていたかぼちゃの茂った葉々の間から抜け切ったような青い空をぼんやりと眺めながら、結局は戦争に負けてしまったのかという思いとともに、これで空襲もなくなり、今夜からは灯火管制もなくなるのかなどと考えていた。とにかく、私たちは、自宅は4月の空襲で米軍に焼かれてしまったが、祖父母の家で、青空の下ではなく、屋根の下で暮らすことができていたので、幸いというべきであった。

学校の再開と混乱する社会

学校が再開されたのは、9月の初めであったと思う。机も椅子も足りず、木の床の上に腰を降ろして、英語や数学の授業を受けた。米軍などの連合軍が実際に日本に上陸したのは、8月の下旬であった。米兵は、服装は日本軍よりもよかったが、われわれは彼等の犯罪に気をつけて暮らした。ある夜、家に来られた方が電車の中で米兵の強盗に遭遇した話をされた。電車の中で、米兵が日本人乗客の腕を探り、片っ端に腕時計を奪った。その方は、それに気が付いて、腕時計を外し、分かりにくいところに隠したので、強奪されなかったとのことであった。占領開始直

後に横須賀で海兵隊員が早速に婦女暴行を起こした。これを報じた朝日新聞は、占領政策に反するとして、48時間の出版停止の処分を受けた。また、あるときは、学校からの帰りに電車の駅から出たら、近くの商店の方が「学生さん」と言って呼び止め、すぐそこの四つ角に米兵の追い剥ぎがいて、通行人から腕時計や金を奪っているから、脇の道を通っていく方がよいと教えてくれた。また、帰宅の途中、新橋駅の構内で煙草を吸いながら歩いていた二人の米軍の憲兵の一人から、こちらにむかって火のついた煙草を投げられたこともあった。その他、見聞きした彼等の犯罪は数多い。しかし、一方、いろいろな目的で米兵に接近する日本人も少なくなかった。ともかく、占領軍の米兵たちからは米国人は柄の悪い連中という印象を得ていたので、米国人にもまともな人々も少なくないことを知ったのは、後年同業の人々と交流するようになってからであった。

連合軍はポツダム宣言で、言論、宗教および思想の自由ならびに基本的人権の尊重は確立されること、と謳っているが、これはあくまで彼等にとって都合のよい範囲のことであった。連合軍に対する言論は全く封殺されていたものの、以前はできなかった日本軍への論評は逆に自由となり、むしろ占領軍にとって、望ましいことであった。そのため、日本軍の「悪事」を殊更に増幅するよう論評も少なくなく、占領軍のそのような意向により作られたようなラジオの番組もあった。ちなみに、当時は、テレビはまだ登場していない。マスコミの論調も同様である。少し前まで当時の「国策」に沿って書かれてお

り、しばしばそのときの権力にしたがって、ある人々を「非国民」と非難していた（例えば、戦争末期の1945年に検察が思想統制のためにでっち上げたとされる横浜事件など）論調は、こんどはほぼ100%方向を転換して、一挙に占領軍という新しい権威の意向に沿って「売文」をしている印象があった。このような構造は現在もあまり変わらないという印象がある。

学校でも、占領軍（当時は、語感を和らげるために進駐軍と呼ばれていた）の意向を受けた文部省が、自身が発行した国定の教科書のうち、占領軍の趣旨に沿わないと考えられる部分を墨で塗りつぶすように求め、各教科ごとに先生の指示にしたがって、墨塗りをさせられた。かくて、文部省がその権威のもとに定めた教科書は、その内容の一端がいとも簡単に抹消されたのであった。後日教授として、役所からの、必ずしも研究の進展には便利とは言えないさまざまな通達や指示に接するたびに、この経験を思い出し、いずれまた変わるのではないかと思った。例えば、大学と産業との関係の持ち方については、行政側の指示は実に目まぐるしく変化し、それに伴って末端の行政官たちもそれに応じて変化した。また、私が経験したことでは、高校の教科書の検定でも、国際的にみたときにどのような教科書が望ましいかという視点よりは、そのときどきのある視野に立ったやり方が強制されてきた。

食料が極度に不足し、インフレによる日常品などの物価の高騰もすさまじい中で、1945年が暮れ、1946年を迎える。戦後、生活の不安の背景もあり、労働運動が盛んになり、多くの労働組

合が結成され、その多くが連合して、2月1日に電車も郵便も学校もすべて停止する大規模のゼネストが計画され、学校では、先生方もそれに参加されるので、ゼネストの間に何を勉強しておくべきかの指示があった。しかし、その日の早朝か前夜に、それまで労働運動に理解を示す様子を示していた占領軍の総司令部はゼネストの中止を命令し、このゼネストは中止となった。占領軍は、いざとなれば、労働組合が連合して国内の機能を停止させて、米軍にレジスタンスする可能性を抹消しておきたかったのかも知れない。

さて、前年の終わり頃から、天皇が戦後の学校の様子を見られるための行幸の話があった。そのために、授業は中止して、生徒たちは何日間も校舎の焼跡の清掃や壁の煤落としや木製の床磨きにおわれた。2月に天皇の行幸があり、各教室を訪ねられた。戦争中まで天皇は神であると教育されており、小学校の朝礼でも校長先生が天皇に言及するときは、必ず、その前に「恐れ多くも」という前書きがあり、それを聞くと、生徒たちは直立不動の姿勢をとって、神に敬意を表させられた。若い読者の方々には信じ難いかもしれないが、1946年初め頃に、天皇が「天皇は神にあらず」という「人間宣言」をされ、その直後でもあったので、天皇と国民との距離がもっとも近くなった頃ではないかと思う。今から考えると、生徒たちは持ち物を検査されることもなく、とくにものものしい警備もなかった。これは、戦時中のあるとき、学校から帰宅する途中、乗っていた電車が天皇の乗っておられる列車とすれ違うことになるので、ある駅で乗客全

員が電車から降ろされ、駅の構外で電車の運行の再開を待つように指示された経験や、また、知人がある大きな駅のホームで、天皇の列車の通過に先立って、警官から身分証明書の提示を求められたということなどは、対照的であった。この頃が天皇と国民との距離が欧州の王室と国民との距離のような関係にもっとも近くなった頃ではなかったろうか。当時は、戦前からの天皇に関する言論の統制もなくなったので、天皇制という制度や天皇の戦争責任に関する議論も活発であった。

敗戦直後の社会の明るさの一面

当時は衣食住すべてに困窮していたが、今とは違った明るさがあった。それは、極端な国家主義的な抑圧が除かれ、以前の専制的な圧迫が追及され、占領軍による統制はあったものの、街全体に文化的再建の空気がみなぎり、おそらく日本史上もっとも明るさと自由と文化への指向が高揚した時代であったろう。しかし、間もなく米ソの冷戦の進行とともに、日本は米国の戦略に取り込まれていき、さらに朝鮮戦争の勃発とともに、占領軍の政策によって社会主義的な考えが排除され、戦後の短い時期の自由な明るさは抹殺されていき、米国では、「社会主義的」とレッテルを貼られた表現や思想に対する過度の弾圧が行われていった。私は敗戦時14歳であったが、14年の間に、神である天皇を頂点とする超国家主義体制、しかしその間の昭和モダンといわれる都会の束の間の賑わい、戦争と空襲、敗戦とそれに伴う価値の大転換、それにすべてに困窮していた生活（とは言え、両親が健在であり、自分た

ちの家ではないが身内の家に住めることは大変に幸運であった)を経験した。生活上の不便は数々強いられたが、この価値の大転換は、明治維新以来であろうし、また明治維新で、日本は外国の勢力の脅威には絶えずさらされていたものの、独立国であったことを考えると、敗戦に伴う経験は、極めて稀な経験をさせてもらった結果となったと思う。

敗戦の年と翌年頃の私にとっての明るい話題を記すことにする。敗戦後学校が再開したときの担任は国語の先生であった。かなり遠くから通勤しておられたが、とにかく生徒たちに読むものと思われ、かなりの分量の文学書を、自宅から混雑した電車に揺られながら教室に運んでこられ、教室の一角の本箱をその文庫として下さった。そのおかげで、私は多くの文学書に接することができた。この先生は大学の卒論で源氏物語を研究された由で、源氏物語に詳しく、後年その研究で文学博士になられたが、毎週1回放課後に源氏物語の講読会を開いて下さった。1年間で最初の巻の「桐壺」を読むのがやっとであったが、源氏の写本には、青表紙本、河内本(かわず本とも言う)があることを知り、また、冒頭の「いづれの御時にか」(原文のまま)の「御時」は「オントキ」というよりも、「オホントキ」と発音すると語調がよいことなどを覚えている。

また、近くにいる友人は幸い米軍による爆撃の被害を免れたので、彼の父上が若い時に購入した新潮社の世界文学全集をしばしば借りて読むことができた。あるとき、別の友人から借りた岩波文庫(当時は非常な貴重品であった)

のトルストイの「アンナ・カレーニナ」を電車の中で読んでいて、日暮り駅で精算するとき、窓口に置き忘れた。途中で置き忘れに気が付き、帰りに精算窓口に行くと、駅員が「一寸拝借して読んでいました」と挨拶して返してくれたが、大勢の人々が読書をしていた時代であった。

敗戦の翌年の秋、学校の上級生の有志たちが原智恵子さん(1914－2001)のピアノのリサイタルを、爆撃で一部破損した学校の講堂で計画した。若い時にショパンコンクールで受賞(非常に興味深い逸話についてはInternetのWikipedia参照)し、天才ピアニストなどと言われた原さんは、必ずしも調律の具合がよくなかったと思われる古いピアノで、ときどき解説を加えながら、ショパンやシューマンの曲などを一生懸命演奏して、聴衆を感動させてくれた。とくに、シューマンの謝肉祭の作曲の背景の解説などを覚えている。

もう一つは、当時来日した英国の桂冠詩人Edmund Blunden(1896－1974)の通訳をされていた英語の先生が、学校の講堂で同氏の詩の朗読会を開かれた。当時、紙の事情は非常に悪かったが、先生のお世話で、立派な紙に詩が印刷され、よくは分からなかったとは言え、初めて耳にする英国の詩であった。

坂道を転がり落ちた日本の戦後は終わったのか

さて、超国家主義体制、戦争と空襲、敗戦とそれに続く悲惨な戦後を経験したが、どうして日本は日米開戦に追い込まれ、坂道を転がり落ちてしまったのか?これには、いろいろな見解がある。

一つの見解は、米国はアジア進出のための港をもつハワイを獲得し、さらにスペインに戦争を仕掛けて、その結果フィリピンを植民地とした。米国は、当初日本からの移民を勤勉な人々として受け入れ、日露戦争の停戦の仲介もしたものの、1905年5月27日の日本海海戦における東郷艦隊によるロシア艦隊の侵攻を完全に防御したのを機会に、日本をアジア進出、とくに中国地域の大きな市場獲得のための邪魔になると見なし、日本からの移民の排斥を初め、軍略家の中には、何らかの口実を設けて日本を撃破すべしとの意見があったようである。日露戦争直後の1906年にはサンフランシスコで日本人学童の隔離事件と呼ばれる事件が起こる。さらに、太平洋戦争前夜の大統領のルーズベルトはかなりの人種差別者のようで、日本人は頭蓋骨の形からして劣っていると考えていた由で[C.ソーン、市川洋一訳、「太平洋戦争とは何だったのか」草思社(1989).]、ジャップは人間以下のネズミであり、優越的な白人に従わないならば、どのように過酷に扱っても構わないという人種的偏見、人種的優越感があったと指摘されている。このような風土が第二次大戦末期の日本の空爆の司令官カーチス・ル・メイが立案、実施した日本を焦土とすることにより日本人を殲滅するための爆撃、さらに広島と長崎で日本人を対象にして、それぞれウラニウムとプルトニウムの核分裂を利用した二種類の原爆を投下してその性能の追跡をもたらしたと見ることもできよう。結果として、日本は米国の思う壺に入ってしまったことになったという見方である。満州事変当時いくつかの欧州の国々はアフ

リカの侵略を続けていたが、国際連盟では日本だけが非難された結果も、当時の日本から見れば、人種差別と映ったであろう。ともかく、北京郊外の盧溝橋での日本と中華民国の軍隊との衝突の処理を初め、日本はいくつかのポイントで適切な処理に失敗し、太平洋戦争に追い込まれてしまった結果となった。

さらに、太平洋戦争をもう少し早く止められなかったのかという思いがあるだろう。長野県の上田郊外の戦没画学生の絵を収蔵した無言館を訪ねると、敗戦の前年からの死者の絵の割合が大きい。たしか、山田洋次監督も同様の感想を述べておられたと思うが、あと1年早く戦争を止められれば、悲惨な沖縄戦も、各地への日本人の殺戮のための空襲、さらに二発の原爆の投下を避けることができた。また、赤紙といわれた召集令状一枚で召集された多くの兵士は輸送船団の何割かでも到着すればよいという作戦で、潜水艦の襲撃にも、空爆に対しても無防備な状態で海外の戦場に送りこまれ、また到着しても食料も武器の補給もない飢餓状態にしばしば追い込まれた。これらは、近代戦を十分な準備なしで大和魂といわれた精神だけで行うということであった。

どうしてこのようなひどいことになったのか。その根底にあるものの一つは、戦前の軍の意向を受けた検察による過度な思想統制などで、日本の中でいろいろな意見の交換が十分に行われてこなかったこと、あるいは島国で、さらに農業国の「村」の風土がそれを妨げてきたのかも知れない。東大で印度哲学を講じておられた中村元教授(1912－1999)は各国の人々のものの

考え方を研究され、「インド人の思惟方法」、「日本人の思惟方法」などの名著を残されたが、その中で、日本人の思惟は、何らかの権威の影響に囚われているのに対し、しばしばインド人の思惟がはるかに論理的であることを指摘されている。これは、日本での議論がたえず、日本のいわば「集团的互助体制」の特徴とともに、何かに制約されやすいことを指摘されたもので、今日にも通じることであろう。

現在、日本が置かれている国際的な環境は10年前に比べて非常に厳しい。米国から一応返還された沖縄、ロシアに略奪されたままの北方領土、多くの島嶼の状況も現状の通りである。さらに、絶えず米国の国内の財政の事情でわが国の財政、税制が引きずり廻される。1985年に海外を訪れた折、旧知の友人が世界は日本をスケープゴート（いけにえ）にしようとしている感じがすると指摘した。いわゆるプラザ合意を押し付けられた年である。最近中国が、海外からの人民元の切り上げへの圧力に抵抗するのは、日本の状況を望ましくない手本としいるだけでなく、さらに中国のもっている軍事力がそれ以上の海外諸国からの介入を防いでいるという見解も示されている。軍事的抑止力のない国に対しては、やりたい放題にやられているという感がなくもない。江戸時代、徳川の3代将軍家光は、何かの口実を作っては、徳川にとって邪魔になりそうな藩のとり潰しを行ったが、その折、加賀の前田藩に対しては、最終的にはとり潰しを実行出来なかった。これは、幕府の魂胆を把握した前田藩が金沢の城下を迷路の如くにし、大量の火薬を保有して、防衛線を固めたの

で、仮に幕府軍が侵攻しても相当の被害を覚悟しなくてはならなかったではないかと思われる。明治14年（1881年）の小学校唱歌の一つは、「西にイギリス、北にはロシア、油断めさるな国のひと、表に条約結ぶとも、心の底はわからぬぞ、万国公法ありとてもー」と唱い、海外に対する心得を的確に示している。

敗戦後、わが国は占領軍の米国により、その教育制度を変えさせられ、その結果として人々の気骨を抜かれ、米国産の穀物等の食料に対する依存度を高めさせられているだけでなく、食料はじめ資源は、外交上で圧迫を伴う取り引きの材料として利用され、ようやく獲得した少々の富も、米国の政策や戦争で掃き出させられ、外交も防衛も独自の展開をし難く、日本を弱体化する占領政策は大成功を収めたかに見える。ただし、米国の当初の中国の市場の獲得の狙いは、必ずしも最初の日論みとは違う展開となったといえよう。現在の日本を見ると、見かけの状況は別として、国家としての基本が敗戦による影響を色濃く引きずっており、果して戦後は終わったのかという印象をもたざるを得ない。21世紀に入って、かつて世界に植民地を築き、繁栄を謳歌した欧米諸国の置かれている状況も急速に変化し、世界の様子が激変し、戦前から敗戦への状況を見た最後の世代ともいうべき私たちの世代も数が少なくなりつつある今日、資源に乏しいわが国が隘路を切り開き、少しでもよい方向に向かうことを期待して、この文を了えたい。

France profonde (Deep France) への旅

評議員 徳 丸 克 己

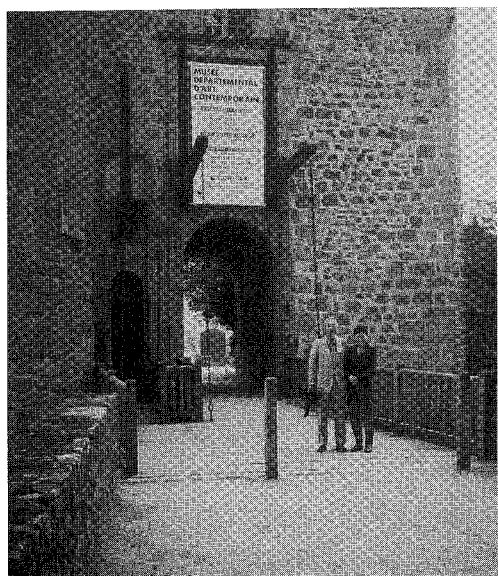
(筑波大学名誉教授・放送大学客員教授)

パリの中心からパリ南大学のある Orsay や CNRS の研究所群のある Gif-sur-Yvette など南に向かう高速鉄道 RER の B 線で十数分のパリ市最南端の Cachan (駅は次の Bagneux が近い) にある Ecole normale supérieure de Cachan の Jean Faure 教授は私と同じく光化学の研究をしており、互いに自宅を訪ねあってきた友人である。80 年代に出来たてのピカソの博物館やまたパリ西郊の Giverny にあるモネが創作に励み日本風の橋 le pont japonais のかった睡蓮の池のある庭園に案内してくれたのも彼である。フランスの友人たちからはいろいろの機会に葡萄酒や文化について見聞を広めたが、彼からは実に多くを学んだ。

フランスの教授の定年は一般に 65 歳であるが、とくに professeur I というカテゴリーに選ばれている教授の定年は 68 歳である。ところが、professeur I の彼は定年までまだ間があるのに、煩わしい管理的職務から離れ、また後進に道を開くためか、早めに引退するという。そこで 1998 年 7 月末にバルセロナで開催される光化学の国際会議に先だってパリの彼の研究室に来て、それからフランスのど真ん中 “le pays de la douceur de vivre” (「生きる喜びある

いは生きる優しさのくに」というべきか) と呼ばれるくにの彼の故郷に泊まり、そのさわやかな空気を味わい、そこから一緒に国際会議に行かないかというお誘いを頂戴した。近年定年を迎えつつあるパリの教授たちには、地方に広い土地を求め、家を整備しつつある人々が少なくないが、これは彼が育った家である。このエッセイは彼の故郷に妻とともに滞在したときのいわば見聞録である。

さて、われわれは彼の車でパリからまず南へロアールに向かい、シャンボール城 Chateau de Chambord に着く。これは 16 世紀にフランソワ I 世の命で建てられ、「風に長い髪をたなびかせる女性」とも評されるが、その設計者は不詳でダ・ヴィンチという説もある。さらに Chateau de Cheverny (16 世紀始めの建築) を抜けて、Cher 川を越えて St. Aignan sur le Cher (12 世紀) の下を通り、le Blanc で Creuse 川を渡り、le Dorat, Bellac, Mortemart という町々を通過して、St. Junien で Vienne 川を渡り、Rochechouart という町に来る。そこで入り口に跳ね橋の架かった 15 世紀のシャトーをのぞいて(なお、この近くの La Tardoire には昔大きな隕石が落下した跡がある由)、いよいよ



Rochechouartのシャトーの入り口の
跳ね橋の上で妻と筆者

Saint-Mathieuという人口1000人位の町に入り、その近く la Marchaderie という彼の故郷の小さな村に辿りつく。パリからは南南西350 kmを超えるドライブであった。

ここはフランス中央山脈のオーヴェルニュの西側に連なる標高約500 mの丘で、ボルドーの北東約150 km、フォアグラやトリフュの産地として著名なペリグーの北約50 kmに位置する。一番近いTGVの駅はボルドーへ向かう列車のアングレーム Angoulême（この大西洋岸はかつてフランス海軍の施設が多く、この駅舎は海軍の士官学校の跡の由）で、そこから東へ約40 kmである。行政的には、Haute Vienne県の西南部で、その県庁のある磁器で有名なりモージュ Limoges の西南西約50 km、Dordogne 県との境に近い。

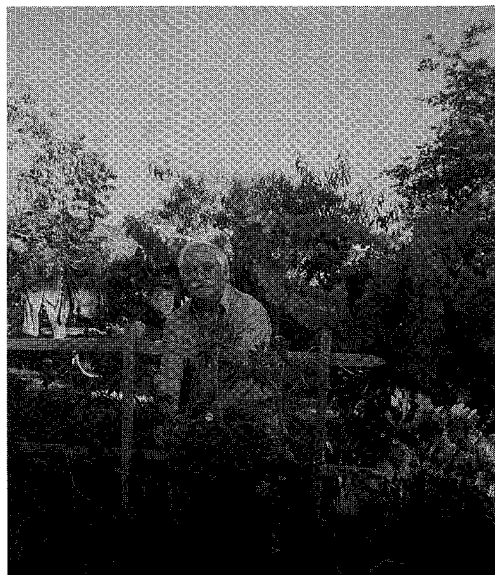
この村は30年位までは店もあった由であるが、人口が減り今は平時が十数

人、夏や週末はそこに設けた別荘に来る人々を合わせて30人位とのこと。この辺一帯は過疎化が著しい。別荘にはフランスだけでなく、ドイツ、オランダさらに英国からも持ち主たちが来る由。かつて14世紀半ばから15世紀半ばにかけて良質の葡萄酒を産出するボルドー周辺のAquitaine地方等の領有をめぐって英仏間で百年戦争が行われたが、今は英国人がこの地域に別荘を持つのも歓迎されている。この辺はいわばFrance profonde、英語で言えば、Deep Franceということになる由。

この辺りは林や沼や谷が多く、起伏に富む。畑もあり、羊や牛の牧場も多いが、地味はあまり豊かでなく、やや酸性らしい。しかし、暫く行くと谷を越えると、急に植生が変わり、地味もよくなる場所もある。したがって、以前から人々は都会に出稼ぎをしたとのこと。彼の祖父もアングレームで働き、週末に徒歩で帰宅するとき、買ってきたパンを夜道で落とし、鳥に食べられないように夜が明けるまでその場所で待ってパンを回収して帰宅したという働き者であった由。よく働くという精神はずっと彼に引き継がれている。

この付近の豊かな森の木を伐採して紙の原料とするため、スウェーデンの製紙会社が進出している。この辺りはリムザン（中心がりモージュ）とペリグー（中心がペリグー）といわれる地域が交わる場所であるが、“pays des feuillardiers”（木板の国）とも呼ばれる。栗の木が特産で、栗は樫よりも湿気に対して強いので、家の建築に利用されるだけでなく、種々の大きさの角材として、またわが国の竹材のように

日常の用にも利用される。なお、この木は食用の実をとるためのものではない。彼の家でも、作業用に角材を購入しておき、庭で野菜の茎を支えるのには1 cm × 4 cm位の断面で長さ1 m位のを沢山使っている。



Faure 教授が庭でこの地方の特産の栗材を組み、それにトマトの茎を結んでいるところ

小川があり、また農業用の貯水池が沢山あるが、彼が子供の頃は小川が深く、水面が広く、魚も沢山いた由。しかし、今は川が浅く、流れもあまり澄まず、広がった木の葉に覆われてその水面も暗く、魚も乏しい。この地域のリモージュの大学の研究によると、川の魚は太陽の当たっている場所を必要とし、また快適に過ごすには一匹あたりある明るい面積が必要で、そうでないと、魚が狭い場所に密集し、その結果病気が伝染したりして死んでしまう。以前は人々が薪をとるために木の枝をはらったが、今は木の枝が伸び放題で、水面を覆って陽光を遮る。さらにかっ

ては流れてきて堆積した砂を取って自宅の建築に利用したものだが、今は商品を利用するので、砂が溜まり放しで、川が浅くなる。

かねてから、彼の故郷の家には可愛がっている馬がいるが、馬齢を重ねたので、乗馬の好きな彼ももう乗らないと聞いていたが、この馬は日中は庭で、とくに夏は木蔭で過ごし、夜は厩で休むが、何年か前にそのつれあいの雌馬が倒れた時刻になると毎日必ずその場所にたたずむという。その庭は馬が楽しんで過ごせる草と樹木のある広い部分と、野菜を作る部分とに分かれている。このようなさまざまな野菜を自家用分だけ作る規模の庭はしばしば司祭館の庭 *jardin de curé* あるいは *jardin de presbytère* と呼ばれ、昔司祭が自分用の野菜を栽培していたことに因む。この辺りの家にはみなこのような菜園がある。庭の一角、家に面したところにパン焼き竈を置いた小舎がある。往時はある家でパンを焼くときには、その火を有効に使うために、村の人々がその竈に自分の粉をもってきて焼いた由。この辺のふすまいりのパン *pain de son* は美味しい。今はパンをはじめ日常の食料は近くのいくつかの町で市が立つ日に車で買いに行くので、その小舎はバーベキューの肉を焼くのに利用している。われわれが滞在中はやや涼しいが好天であったので、そこで焼きたての肉を庭先のテーブルで味わった。

この家はかなり古い様子であるが、どっしりとした古い木の収納箱などのある台所と食堂、ぶどう棚のあるテラスに面した居間などのある家で、それに工作用の作業場、竈のある小舎、納

屋に厩などがある。



Faure 教授の家のぶどう棚のあるテラス

ヨーロッパには、地震の少ないためもあるが、大工仕事をはじめ建築の仕事の上手な人々が少なくないが、Jean の能力は抜群である。彼はパリ郊外のオルセイの駅に近い丘の上の家で、数年かけてベランダのある部屋を増築した。その部屋での落葉の頃の秋の明るい日差しの下での昼食や庭での夏の星空の下での夕食など数々の楽しい思い出はまさに彼の手作業の成果が齎してくれたものであった。ところで、この田舎の家もこの夏には彼が手を入れているので、われわれは夜は3-4 km離れたDordogneのReilhacという村にある彼の夫人 Jeanne の母の家に泊まる。この村もかつては千人位の人口が現在は300人位。役場、郵便局、小さな食料品店にパン屋、小さなレストランとカフェなどはあるが、空き家の店が目立つ。

この婦人は長い間村の小学校の先生をされ、さらにその昔は小さな学校であったという広い家に住んでおられる。食事をする部屋は、昔はそこの先生たちが昼食をとったので、10人以上が楽に食事できる広さで、私たちはそこで一緒に朝食のお世話になった。この方

は家のあちこちの本棚に沢山の本を置き、居間には5人の子供たちとその配偶者たちと10人の孫たち（現在フランスでは若い人々はなかなか結婚という手続きに至らないので、曾孫はまだいない由）の小さいときからの数々の写真を飾り、思い出を大事にしつつ、好天の季節は、昼間は広い庭の木蔭で読書、時には来客と歓談し、夜はCDで古典音楽を聞くという生活を楽しんでおられる。家の掃除や食事の一部はほぼ毎日きまった時間帯に手伝いに来てくれる女性の担当である。夏は訪ねてくる人々がいるが、冬は夜がとても長いとのこと。お土産に頂戴した手製のフォア・グラは、周囲を脂肪で囲んだまさにこの辺りの特徴あるものであった。

さて、この地域は歴史の古いところである。有史以前といわれる壁画があるラスコー Lascaux の洞窟もペリグーから少し東である。彼の家の近くの Les Salles Lavauguyon にある l'église Saint-Eutrope は11世紀の終わりに建てられたローマン建築の教会で、ほかにも古い教会が多い。

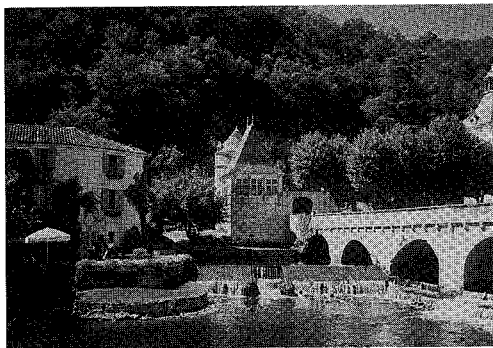
この近くでは Nontron が人口3-4千人の大きい町で、ここで週に2度ほど



Nontron の町の市で。Faure 教授夫妻と筆者の妻

立つ市はなかなか賑やかである。フランスの市場は食品が豊富で楽しいが、さらにここでは土地のチーズだけでなくフォア・グラも加わる。また、リモージュ焼の磁器を扱う店もあり、彼らもリモージュとともにわが国の有田焼等を評価している。

さらにこの南に Brantôme という町がある。ここで 11 世紀にシャルマーニュによって作られた古い僧院がさらに 16 世紀に Brantôme によって発展され、激しい宗教戦争に生き残ったこれら町の中心が水路で囲まれてなかなか美しい。現在観光客の集まる町で、パリゴのヴェニスとも云われる。



パリゴのヴェニスとも云われる Brantôme

この町の近く北東には Chateau de Puyguilhem というフランソワ I 世の頃の 16 世紀のシャトーがある。また Villars にある鍾乳洞はかなり深く、長さも 13 km に及び（但し観光用には数百 m）、石筍が見事である。フランスでは、このような人の集まるところや高速道路の駐車場にはピクニックランチ用のテーブルと椅子が多数備えられており、その木蔭で用意してきた食事をするのも大変に楽しい。これは、わが国よりも国の面積、ことに平地の面積が広

く、より過密でないことと気候の違いを反映するものであろうか。

第 2 次大戦のときは、この辺もドイツ占領軍に対するレジスタンスが盛んであった。1945 年春の連合軍のノルマンディ上陸のとき、マルセイユ方面からこの付近を北上する独軍の進路を妨害するため、住民が道路に木を切り倒したのを当時少年であった彼はよく覚えているとのこと。このため、村によっては独軍により住民が教会に押し込められ殺害されたが、その命令者の独軍の将校の名前もよく記憶されている。これと対応して、当時の空爆下のわが国の住民の状況も述べたいところであるが、先へ進む。

先に述べたようにフランスには田舎に広い土地と古い石の家を得、その内部を改装して住みたいという人々が少なくない。そこで、この付近の不動産屋の店先の広告の例を紹介したい。Charente（コニャックの産地）から東へ 25 km の町、1,732 平米の庭付きで新たに改装した家屋 48 万フラン（1 フランは 20-25 円）。比較的安いもので 16.5 万フラン。また田舎にある 15 世紀のシャトー、内部の改装必要。町の中心から 1 km、約 1,000 平米の庭付き、水道、電気、電話あり。価格は相談に応ず。等々。

わが国も江戸時代は各地が独自の文化を誇り、戦後しばらくまでは各地の特徴がよく見られたが、フランスに来るたびに各地の特徴を味わう。伝統ある各国がグローバル化という大波にさらされている折から、To be international, be national という言葉を一層痛感する次第である。

久しぶりのヨーロッパ旅行記： 一期一会の旅

理 事 徳 丸 克 己
(筑波大学 名誉教授)

久しぶりに海外へ

2008年夏、久しぶりに海外で開催される光化学の国際会議に参加する。これは、現役の教授の方々から、今度是一緒に参加しませんかとお誘いを受けたからであるが、私にとっては、これはいわば古巣とも言うべき会議で、西暦の偶数年ごとに2年おきに開催されるこの会議には、1974年に初めて参加して以来、大学の仕事で参加を諦めた78年、それに2002, 04年の3回を除いてほぼ皆勤してきた会である。今回の開催はスエーデンの第二の都市で、西部の、デンマークに面した港湾都市のヨーテボリ(あるいは、イヨーテボリ; Goteborg, 英語綴りで Gothenburg) である。この会議に初めて参加した74年は、オランダの東側、ドイツ国境に近い Enschede の工科大学の広いキャンパスで開催され、全員大学の宿舎に泊まり込む方式で、参加者も欧米を中心に約200名、わが国からはわずか4名に過ぎなかった。オランダ特有の冷たい夏で、しばしば雨に見舞われ、会場や宿泊室には暖房が入っていた。

当時、西欧に向かう主な空路はアラスカのアンカレッジ経由で、夜羽田を出発して、アラスカで起こされ、また機内に戻り、早朝に西欧の空港に到着し、時間も長く、非常に疲れるルートであった。

しかし、便数は少ないが、ソ連のエアロフロートが、羽田を昼頃に出発し、モスクワを経由して当日の夜に西欧の空港に到着するフライトを運行しており、航空券も当時としては格安であった。さらに、当時は機内のアルコール性飲料はすべて有料であったが、エアロフロートは無料で、グルジアの葡萄酒が供され、食事にはキャビアもあり、ウオッカの好きな人々は、キャビアとの組み合わせを楽しんでいた。そのようなわけで、74年夏にはエアロフロートでオランダに赴いたが、このルートは、その後利用しないことにした。しばしばフライトが予定していない東ベルリンの空港に突如寄港し、そのために到着がかなり遅れ、76年夏には、あまりにも遅いパリ到着となり、不便な思いをしたからである。

妻とともに行く旅

私は海外の国際会議には、教授としての後半の約10年はしばしば妻とともに赴いた。一つには、光化学の分野の海外の教授たちがつくばを訪れるときは、夫人と一緒にすることも少なくなく、その際に私たちの家で夕食をともにすることが多く、私が海外に単身で赴くと、妻はどうして来ないのかとしばしば尋ねられたからでもある。また、妻がいる方が、全体

として、海外の同業の人々たちとのコミュニケーションもよい。私が会議に出席している間、妻は、レディースプログラムがあるときは、それにしばしば参加して海外の夫人たちとの旧交をあたため、あるいは一人でいるときは街を歩いて、様子を仔細に見たりしている。私どもの分野の海外の教授夫人たちは率直に話をする方々が多く、夫人たちの仕事のこと（以前は教授夫人が職をもつことが歓迎されていなかった国もあった様子）、家族のこと、老齢になった親のことなどが話題になっている様子である。因みに、私の英語はもっぱら専門の分野であるが、妻の英語は私よりもかなり広い。妻がいると、街の人々の暮らしなど、私一人では気付かずにいることが分かることも大きな効用である。私一人で見れるよりも、確実に多くのことが分かる。

また、妻と一緒にいると、見知らぬ人々が安心する感じもある。イタリアに交換プログラムで訪れたとき、私のホストはペルーシアの大学の同業の教授であったが、ペルーシアの駅の待合室で隣にいた私たちと同年輩のイタリア人夫妻から手持ちの昼食を一緒にいかがかと誘われた。多分農家の方々であろうか、なかなか美味しそうなサンドイッチで、興味があったが、遠慮したことがあった。ただし、妻は一人で行動するときには、それなりに気を遣う。あるとき、ミラノに滞在中、トリノの大学に招かれた折、妻もトリノまで一緒に赴き、トリノの駅で別れた。一人でミラノに戻るときは大変緊張したようで、女性客が一人いるコンパートメントを選んだ。その列車はたしかにミラノ行きであるが、改めて確かめかたがた、たどたどしいイタリア語で会話をしている内に、先方は英国人であ

ることが分かり、以後互いに英語でミラノまで無事到着した。また、オックスフォードに滞在し、私が大学を訪ねている間に、妻はストラットフォード・アポン・エイボンを訪ね、シェークスピアの妻のアン・ハサウェイの家を訪ねるバスで屋上でニュージーランドの母娘と友達になり、クリスマスカードを頂き、以後文通をしたり等々。

妻は学生の頃に読んだバージニア・ Woolf (Virginia Woolf) の “A Room of One’s Own” のように、必ず自身の精神の room をもつことを信条としており、つくばにいた当時は、日本中央競馬会や競馬学校で英語を教え、収入を得ていた。そのため、海外のホテルの部屋代は一人でも二人でも同じかあまり変わらないので、部屋代はともかく、航空券は必ず自前で購入することを旨としていた。

10年ぶりのパリへ

話が逸れたが、2008年7月、妻とともに、成田を昼前に発つ航空機で、約12時間の飛行の後、現地時間の午後4時半頃にパリに到着する。シャルル・ド・ゴール空港からオペラ行きのバスに乗る。以前はモンマルトルのサクレクール寺院の丸い屋根を眺められる道路を通ったが、今回は途中から違う道に入り、街中を歩いていく。パリは客員教授としても二度滞在していたこともあり、現役の頃からもっとも高い頻度で訪れた街である。やがてオペラ座の脇に到着。荷物がなければ、歩ける距離のホテルであるが、街のバスに乗り、数分でパレ・ロワイヤルに着く。そこの古典劇の劇場のcomedie・フランセーズの近くの小さなホテルに入る。このホテルは丁度40年前の1968年にパリの大学を訪れたとき

に初めて泊まって以来の馴染みのホテルである。と言っても、経営者とは知り合いではない。最初の68年から80年頃までレセプションには同じマダムが居たが、それ以来はしばしば顔が違う。予約のときのリクエスト通りに、静かな裏通り側の部屋に入れた。長い間宿泊していると、付近の地理が分かっているのが便利で、早速数軒先のいつもの店で、必需品の飲料水等を仕入れてくる。パリは、翌日に訪れる ENSC のジュアン・フォール教授に98年に招いて頂いた以来のまさに10年振りの訪問となった。

ひと休みをしてから、飛行機の中で一応の食事は済ませているものの、散歩かたがた、行きつけの小さなブラスリーに行く。この近くには以前サントノレの市場があり、その付近の飲食店の一つである。以前は日本人の客を見かけることはなかったが、近年は日本で出ている案内書にも紹介されているが、それでも日本人に会うことは滅多にない。店に行ってみると、以前顔馴染みであった夫妻とその母親は引退して、別の女性たちが店をやっていて、以前と違って客に応じて英語も話す。一般にこのような店は常連の顧客で賑わうので、とくに海外の旅行者を期待していない。また、オフィス街では、常連の顧客のテーブルを確保しておきたいため、必ずしも旅行者を歓迎していない店もある。この店は、いろいろな葡萄酒をグラスで味わえるが、以前から夕方は暖かい食事はないので、チーズと葡萄酒をとる。

初日としてはまずまずの眠りから醒めた翌朝は、レセプションの脇のテーブルで朝食をとる。70年代頃までは、朝食はルームサービスしかなかったが、それ以降は現在のやり方である。いつものよ

うに、たっぷりのカフェ・オー・レーとバゲット、クロワッサンの典型的な食事を摂る。

カシヤンのエコール・ノルマル

その日は、パリ南郊のカシヤン(Cachan)にあり、以前に客員教授として招いて頂いていたエコール・ノルマル・スペリユール・ド・カシヤン (ENSC) を訪れる約束である。私と同年輩であった Jean Faure 教授が引退したあとで、現在若い日本人の中谷圭太郎教授が仕事をしておられる。Jean Faure と一緒に彼のフランス中南部の故郷を訪ねた話は「尚志」(1999年)に記したが、彼とはいろいろな実のある交流を楽しんだものであった。私よりちょうど一世代若い中谷さんはパリのエコール・ノルマル・スペリユール出身の秀才で、若くして教授に昇進した方である。因みに、フランスでは日本に比べて古くからエリート教育が行われ、日本の高校に相当するリセーのあとで2年間エコール・プレパラトワール(直訳すると、準備校)に通い、大学とは異なる系列の一群のグランゼコール(grandes ecoles)に厳しい試験を受けて入学する。この時点で、通常の大学(ユニヴェルシテ)の前期2年を修了した年限に相当する。グランゼコールには、多くの大学教授を輩出しているエコール・ノルマル・スペリユール、それにフランスの政界や財界で活躍する人々を多く送り出しているエコール・ナチオナル・ド・アドミニストラチオン(ENA:国立行政学院)等がある。国際的な交流の多い今日、エコール・ノルマル・スペリユールの出身者を共同研究者としてもった教授たちからも彼等はよく出来るという言葉をししばしば耳にする。

ホテルのそばのパレ・ロワイヤルからは地下鉄で行くと、シャトレ駅での地下道の乗り換えが非常に長いので、バスでセヌ川の脇を通りながら、リュクサンプールに着く。道路が混雑しているかと思い、早めに出かけたが、非常に順調にバスが走った。リュクサンプール公園の前から、高速鉄道 (RER) に乗り、バニューに到着。早すぎるので、付近を散策して駅に戻り、迎えに来て下さった中谷教授と会い、近くのレストランに昼食に案内して頂き (写真1)、伝統的な懐かしい感じの食事をご馳走になり、ENSCに向かう。われわれは早速、最近の研究の討論や実験室を見学する。その間、同行させて頂いた妻はゆっくりと午後の読書を楽しむ。翌日も仕事のつづきをする。

パリの街で

週末の土曜日には、セヌの反対側で、徒歩十数分のオルセイ美術館を久しぶりに訪ねる。やはり絵は、その絵が常時置かれている場所で楽しむのがよいと思っている。海外の美術館のわが国での展示は、混雑している上に、内容が非常に希薄であると感じたことがあり、それ以来足を運んでいない。以前この印象派の絵画はコンコルドに近い、小さいジュウ・ド・ポムに納められており、そこで初めて印象派の絵を見て感激したものであったが、今でも見飽きることのないものであり、今回は今まで気の付かなかったいろいろな絵にも出会えた。元来は決して眼のよくない妻が非常に面白い絵を見つけたという。アンリ・ラトゥール (1836-1904) がアルチュール・ランボオやポール・ベルレーヌら象徴派の詩人たち数名を描いた“Un coin de table”

(食卓の片隅)と題する絵である。かれらの詩を想いだしつつ絵を楽しむ。また、ルドンのブッダの絵にも初めて気が付いた。

昼食はパリに到着した夕方に訪れた店 (写真2) に行く。ここは昼には付近のオ



写真1. パリ南郊カシヤンのレストランの前で
ENSCの中谷教授とともに



写真2. パリのブラッスリーの前で

フィスに勤める人々等々でいつも大変に賑わっているが、土曜日も同様で、やっと席にありつく。いわば定食屋のようなものであり、仔牛の脳 (tete de veau) や塩漬豚 (petit sale) などの定番的な日替わりのメニューもある。このような店の料理には力強さがあり、メインの料理に豆やいもなどの野菜がいわば山のように盛られてくるので、日本の多くのフランス料理店のいわばそこはかとないうの定食とは感じが違う。以前からの妻の観察によると、肉類は若い男性客の盛り付けが多く、私のように若くない男性客はそれよりやや少なく、女性客にはさらに少なくほどよく盛られてくる。皆、それを葡萄酒と一緒に勢いよく楽しんでおり、まさにフランスに来ていることを実感する。なお、欧州諸国は伝統的には、昼食が一番のご馳走であるところが多かったので、フランスの大学のスタッフの食堂も70年代までは定食に飲み物として、好みに応じて、葡萄酒、ビール、ジュースかミネラルウォーターのいずれかが付いていた。しかし、その後生活形態の変化にあわせて、私が最初に客員教授として、郊外のオルセイ (美術館とたまたま同名) にあるパリ南大学に滞在した80年代半ばには、定食には飲み物が含まれなくなっていた。

因みにこのような定食の一皿は11-13ユーロ程度、旅行中は1Euroが170円を越えていたので、邦貨で、11ユーロは約1,900円、この原稿を書いている09年初めのレート、約120円では、約1,300円でお値打ちで、この辺が妥当なところと思う。もちろん、同じものは日本国内では提供されにくいと思うが、パンをつけて1,500円ならばよさそうである。円が高くなると、輸出しにくいとい

う点もあるが、米国が絶えず強いドルを強調しているように、一国の通貨はある値段を維持するのが、権威があると思う。何かあったときに、たちまちレートが下落したからとて、輸出が増えるわけではない。

パリなど欧州の街の一つの問題は、勘定を誤魔化されないようにすることである。久しぶりに訪れ、顔見知りも居ないと、早速手書きの伝票で合計が約10ユーロ多いことに気が付き、フランス語で足し算をした次第であった。以前は駅の窓口で現金で切符を購入したが、そのような折、例えば15フランの券を100フランの紙幣で求めるとき、欧州では、釣り銭を少しずつだして、切符代と釣り銭が合わせて100フランになるようにお釣りを出すが、そのとき、券に足して、5フランで20フラン、さらに10フラン3枚で50フランとなるが、このとき、ずっと手を出し続けていないと、残りの50フランが誤魔化されてしまう。駅でもタクシーでも、しばしば、最後の50フランを残念そうに出すのを見たものである。釣り銭の出し方がわが国とは違うこともあるが、わが国の駅で釣り銭を故意に誤魔化することはなかったように思う。英国も同様、以前の通貨の時代、ある年長の教授から、1ポンドは10シリングでなく、20シリングであることを忘れないようにと、5シリングの買い物をして、まず5シリングのお釣りを受け取っても、手を引込めてはいけないとアドバイスをされた。貧富の差が大きいと、このような習性を身につけている人々の割合が比較的に多いのであろうかと思う。かつてのフランス映画にはスリがしばしば重要な役を演じた。わが国でも落語の「時そば」では、わずかの釣り

金を誤魔化そうとしている。

店の外を歩いていると、日本人の経営している書店があり、そこで当日の日経新聞を購入する。また、パソコンは重いため、持参してこなかったのも、そのすぐ近くの日本語のパソコンが利用できるインターネットカフェに行く。日本人の若い夫妻の経営である。沢山のジャンクメールの中から大事なメールを拾いだす。ここはいわば入室料を払うと、あとはパソコンのほかに、日本語の新聞、雑誌、漫画、さらに休憩したいための畳の部屋まであり、これらの便宜がかなりよく利用されている印象であった。したがって、新聞もここで読めばよかった次第であった。もう半世紀位前であろうか、「巴里繁盛記」という芝居があり、当時の典型的な日本人の海外旅行のスタイルと言われた眼鏡をかけてカメラをぶら下げた男性を芥川比呂志が演じていた。フランスの文化を深く知ろうと思って、パリの生活が長くなり過ぎてしまった初老の男性が、同じようなことを考えてパリに滞在している若い大学の研究者に、自分のようにならないように、切りがないから帰国した方がよいと勧めたりする。パリには以前から日本料理や日本の麺類の店が多く、その中には経営者が日本人でない店も少なくないが、今やこのような店には多くのフランス人も来ている様子である。パリで積極的に仕事をしている日本からの人々を見て、半世紀のときの流れを想う次第であった。

パリはノートルダムの辺りなど、いわゆる観光スポットにはものすごい数の人々が群がっており、EU各地の人々も多い様子である。京都の清水坂など春の季節には人々が行列して歩く感じに似ており、どこの国も、観光地でもある大都

会に共通しているが、以前ほどには落ち着いた感じが乏しくなっている。

パリは同世代の同業の研究者らとの家々での交流も多く、また少し上の世代の教授たちにも非常によく遇して頂いた街であるが、すでに他界された方々もあり、また余計な負担をおかけするので、今回は彼等には連絡せずに済ませた。たとえば、パリのエコール・ノルマル・スペリユールのM.J.教授から8月のある日曜日の昼食に何人かのお客さんと一緒にお宅に昼食にお招き頂き、そのあとで久しぶりに街の散歩にと誘って頂き、用意して下さった夕食をまたご馳走になったりしたこともある。また、物理化学のエコールのJ.R.教授からはいつも、最後にはシャンペンという、まさにフルコースの夫人のお料理をときどきご馳走になったりした等の数々の思い出がある。私と妻はこのような方々から教授としてのつきあいを無言で教えて頂いたと思っている。

ヨーテボリへ

さて、翌日の日曜日は再び、来た時と逆のルートで空港に向かう。混雑した空港で見ていると、概してアフリカから来た感じの職員の対応が非常によく、いつものことであるが、元来のフランス系の職員には、出来るだけ仕事は最小限で済まそうという感じを受ける。郵便局の窓口でも、同様の印象を受けた。雇用者の仕事への姿勢が元来の日本の場合とは、かなり異なるのが以前からの印象であったが、今回はとりわけ、在来系と移民系の違いが際立った。

空港のヨーテボリ行きの待合室では、この国際会議に参加するフランスの知人や日本からの参加者の方々に会う。パリ

から約2時間半の飛行で午後3時頃にヨーテボリに到着。市内に向かうバスは丘の間を走り、間もなく最初の停留所で降り、コンベンションセンターに隣接するホテルに入ると、古い知り合いの二組の米国の教授夫妻と出会う。その一人は、互いに家庭にも行き来したF.L.教授で、一緒に共著の論文も発表している。65歳になったので、研究室を縮小中とのこと。

さて、ヨーテボリに来るのは初めてであるが、私にとっては気持ちの上では馴染みの深いところであった。私たちの研究室で80年代にある光化学反応で教科書に書かれているのとは全く違うタイプの新しい反応を発見した。しかし、既成の観念が強く入っている多くの研究者にとっては直ぐには信じ難いことであった。当時ヨーテボリの大学で同業のHans-Dieter Becker教授らも、似た化合物で同様の新しいタイプの反応を見だし、ある時期までは、各国の研究者らに対して、彼とは、ともに新しい概念を主張した二人の同志でもあった。彼は80年頃にしばらく京大に滞在したので日本語をかなり理解し、また日本の文化にも馴染んでおり、その折やまたその後にも来日の際にはつくばに訪ねてきたり、しばしば国際会議で一緒であったりした。また、88年にイタリアのアッシジの有名な僧院のそばの巡礼や参詣の方々が泊まる施設で、私たちの専門分野の泊まり込みのワークショップが開催された折も、一緒にスピーカーであったりした。このときに、やはりこの大学の大学院生であったMikael Sunhahl氏が私の講演を聞いたあとで、ぜひ私どもの研究室にしばらく来たいと希望されてきた。その数カ月後から数カ月私たちの研究室で一緒に研究し、帰国後博士論文を仕上げ、再び、今

度はわが国とスウェーデンの交換プログラムで私たちと一緒につくばで研究し、数編の論文と一緒に発表した。彼を通して、スウェーデンの研究者の堅実な仕事ぶりを見ることができた。また日常では、海産物に親しんでいる国柄、塩焼きの一匹の魚の食べ方が実にきれいであることも分かった。このような魚の料理の食べ方は、しばしばスウェーデンの方々について感じたことであった。

ヨーテボリの街で

さて、到着したホテルでひと休みしたあとで、街へ向かう。ここは旧市街からはやや離れている。市電やバスもあるが、街を知るには歩くのがよい。途中の公園の木陰のベンチで休んでいるボローニャの女性の研究者に出会う。港のオペラハウスのレストランで食事をした帰りで、一休みしているが、これから行くと、まだ日没に間に合うかも知れないと、また摂った料理の感想も教えてくれる。港までかなりあり、妻は少々疲れたので、途中で市電に乗ると、次の停留所で、運転手の方からそのまま降りてよいとのご好意を頂戴する。

オペラハウスはオフシーズンであるが、レストランが港側に面しており、そのデッキからの展望がよい。まだ日差し強い海側のテーブルで、夕食をとる内に、午後9時頃に空が暗くなり始め、鳥たちが啼き、日没を迎える(写真3)。

スウェーデンは昔から物価が非常に高い。それはいわゆる消費税率が高いからである。因みにミネラルウォーター500mlの1本が18~20SEK(スウェーデンイシュクローネ)で、会議当時は円が安く1SEK~20円、したがって邦貨で1本約400円である。他もすべて同様で



写真3. ヨーテボリのオペラハウスのレストランで妻とともに、日没の直後

あり、これは人口約900万人の国が高福祉を目指したときの税率の高さを示すものである。しかし、高税率であっても、ある種の安心感から人々の暮らしは安定している印象を受ける。冬が寒い等々の自然条件はあるものの、安全保障に関する地政学的な位置はわが国よりもはるかに恵まれているであろう。

北欧やドイツ文化圏の朝の食事は一般に豊かであるが、宿泊したホテルの朝食もさまざまな果物、乳製品、ソーセージやハム等に上質のパテ、それに北欧風のいろいろなパンが揃い、充実した朝食を楽しむ。しかも、リンゴ、オレンジそれにバナナ等の果物を少々持っていく習慣もある様子である。

月曜日の朝からは国際会議に参加する。参加者は世界各国から約500名、その内の約2割強がわが国からの参加者で、この分野におけるわが国の活力を反映しているであろう。筑波大の私たちの研究室の出身者も5名参加し、セッションの座長や講演発表に活躍している。わが国からも欧州諸国からも、大学院生を含めて若い人々の参加が多いのは結構なことである。国際会議ではいろいろな発

表を聞き、新しい情報も得たが、専門分野のニュースレターに記したので、ここでは述べる。会議の午前と午後にはコーヒブレイクがあり、飲み物と菓子類だけでなく、果物やサンドイッチもたくさん供される。今回の会議の登録費もそれなりであったが、サービスも非常によい。

旧友 Hans-Dieter との再会

月曜日の昼は、妻とともに昼食に出かけ、知り合いたちが庭で食事をしている小さなレストランに合流する。午後は会場に戻り、夕方は市電で旧市街の市庁舎で市長の歓迎レセプションに参加する。さまざまな料理が並ぶ。旧友の Hans-Dieter Becker が療養中のところを出かけてきてくれ、十数年振りに再会し、歓談する(写真4)。彼の子息の Hans-Christian もウプサラの大学で助手として、やはり光化学を研究し、この会議に参加している。また、火曜日の夕方はやはり近くのレストランの庭で、日曜日にホテルの入り口で出会った米国の教授夫妻二組と京大の教授、韓国の教授夫妻で歓談しながら夕食を楽しむ。



写真4. ヨーテボリの市庁舎のレセプションで、Hans-Dieter Becker 教授、その子息の Hans-Christian と妻とともに

水曜日は昼で会議が終わり、午後はエクスカーションで、港から2隻の船に分乗し、Marstrand島に向かう。約2時間の航海が、討論や古くからの仲間の教授や夫人たちとの交流の時間となる。英国のF.W.教授夫妻は船旅が好きで、大西洋をクイーンエリザベスⅡで航海した時のこと、また今回もロンドンからストックホルムに飛び、そこから運河を経由する船旅でヨーテボリまで来たことなどを聞く。到着した島には古い要塞があり、坂道を登り、城内の狭い石段を上がり、晚餐会に参加する(写真5, 6)。古い石造りのため、話し声があちこちに反響する。ホテルには夜更けに戻る。

木曜日の午後、会場でHans-Dieterがご子息の講演を熱心に聞いている。なかなかよい講演であったと誉めると、「いや、まだまだ」と謙遜している。コーヒープレイクの頃に妻と3人でゆっくり話をする。彼はかつて京都に滞在していたときに寄宿先で頂戴した「一期一会」という言葉の書が非常に気に入っており、同氏が治療中であることもあり、とくにこの言葉をコピーした葉を作ってくれて、記念にプレゼントしてくれる。彼の健康のこと、つくばの私たちの家に2度来てくれたこと、まったく同じ年同士のわれわれの若い頃のこと等々、話は尽きないが、まさに「一期一会」を噛みしめつつ、尽きない別れを惜しむ。

翌日の金曜日は昼少し過ぎに閉会となり、ヨーテボリからロンドンに飛び、乗り継ぎで嫌になるほど歩かされるヒースロー空港から帰国した。元気に充実した旅を楽しむことができ、お世話になった方々と天(としか言い様がないが)に感謝して筆をおく。



写真5. Marstrand島の古城に向かう坂道



写真6. エクスカーションで赴いたMarstrand島の古城の晚餐会で妻とともに